
暖かな想い<アナザーストーリー>

vicious

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暖かな想い<アナザーストーリー>

【Nコード】

N2330K

【作者名】

V i c c i o u s

【あらすじ】

転勤族だった荻野祐樹おぎのゆうきは、この秋から一人暮らしを始めた。転校初日に里佳と出会い、彼女の優しさに惹かれていくが・・・。

千堂里佳といます（前書き）

本当はリメイク作品にするつもりだったのに、中盤あたりからストーリーが変わってしまったので、もうこの際アナザーストーリーにしちゃえと（笑

まあ、そんなノリで執筆。

あ、でも後の辻褃合わせのために序盤もちよこちよこ変えているので。

千堂里佳といます

シリシリシリシリシリシリッ!!

まどろみの中で酷く不快な音が部屋に鳴り響く。

眠い目をこすり、脇にある目覚まし時計に手を伸ばす。

ガチャツと鈍い金属音が妙に残るが、目の焦点が定まらない。

瞼がとても重く、また閉じようとする。

だめだ……。また寝てしまいそうだ。

こういうときは、いつも思いっきりほっぺたを叩いて目を覚ますのが効果的だ。

せーの。

バッチーーン!!!

少々やり過ぎてしまった。

寝起きということもあってか、目から少し涙があふれ出てくる。

この次はもう少し控え目なピンクにしないとな。

まあ、とにかく目は覚めた。

「もう朝か……。今日は何があるんだっけ？」

ひりひりするほっぺをさすった後、机にある手帳を開いた。

今時の学生にしては珍しいが俺、荻野裕樹おぎのゆうきは手帳を使っている。

俺の一家は引越しの多い、いわゆる転勤族というやつだった。

そのせいかスケジュールを書くことが癖になっているのだ。

「しかし自分から言い出したことだが、一人暮らしも楽じゃないな……」

今まで母さんがしてたことを全部俺がやらなきゃいけないのはわかってはいたが、まさかここまで面倒くさいとは思わなかった。

というのも、俺はこの9月から転校生として高校生活を送るのだ。

そして2度と転校しないように学校近くのマンションの一室に住むこととなった。

両親も転校が多くなってしまったことを前々からすまないと思っていたのか、俺が提案するとあっさり承諾した。

ありがたいことに、経済的な面も全く心配ないらしい。

さて、回想はこのくらいにして朝飯食うか。

モグモグモグ。ゴクゴクゴク。はい、ごちそうさま。

適当に朝飯を食って、学校に行く準備をする。

……ふと時計を見た。

8時10分。うん、そろそろ学校に行つたほうがいいな。

戸締りをした後、学校までの道をのんびり歩く。

いつもは転校初日じゃ緊張しないのに、今日はなんだか胸が高鳴っている。

それほどに今回の転校は俺にとって意味のあるものだった。

「てゆうか、この暑さのせいでもあるのかな。残暑がきびし……ん？」

十字路にさしかかると、ふと横目に落とし物を発見。

見たところ生徒手帳っぽい。なんだか俺の生徒手帳にそっくりだ。

「あれ？俺の生徒手帳と一緒にじゃん！ってことは同じ学校の……」

生徒手帳を開いてみる。真っ先に目についたのは女の子の写真。

「……か、かわいいな」

転校のプロである俺が思うんだから間違いない。

今まで見てきた中でも指折りのかわいさだ。

穏やかな目にキュッと引き締まった唇。髪はサラツとしたセミロング。

名前は『千堂里佳^{せんどうりか}』か……。

学年は2年生なのか。俺と一緒にだな。

「まあとにかく届けたほうが良さそうだ」

確かこれは学食のペイカードでもあったはず。

なくしたら昼飯が食えないし、使い込まれるのを心配してるかもしれない。

とりあえずカバンに入れておく。後で職員室の先生に渡しておこう。

「たしか職員室はこっちだったよな」

数日前の入学手続きの記憶を頼りに職員室を探す。

が、果たしてどこだったか。俺はよく道に迷うのだ。

ずばり、俺は方向音痴なのである。

「ホント方向音痴ってこういうときに苦労するんだよな」

自分のステータスを嘆きながら廊下を進む。

そして、つきあたりにあった角で左に曲がった……

ドカツ！！！

「ぐはっ」

「きゃっ！」

少しよろめいてコケそうになったが、なんとか踏みとどまった。

ぶつかったときの衝撃と痛さからして相手は走ってきたようだ。

それと、この声は女性のものだろうか。

「「ごめんなさい!」」

声がハモッてしまった。ふとぶつかった相手の顔に目を向ける。

やはり女の子だった。それも、とびきりかわいい。

ってあれ?この子どこかで見たような……。はて?

「って、さっきの生徒手帳の!」

拾った生徒手帳の写真に写っている女の子だった。凄い偶然だ。

まるで漫画やアニメのような展開。

もしかしてこれは何かのフラグでも立ったのだろうか?

「私の手帳あなたが持つてるんですか!」

彼女は凄い勢いで顔を寄せてきた。顔と顔の距離がゼロになりそう
だ。

てか、ホントに近すぎるんですけど。

思わず後ずさりをしてしまった。

「あつー、ごめんなさい」

自分のしたことに気づいて彼女は赤くなった。

少し恥じらいを含んだ顔もまたかわいいな。

「それで、あの、私の手帳あなたが……」

彼女の体は細くスラッとしている。

ワインレッドの色をした制服の間から見える彼女の肌は白い。

「えと、あの、手帳……」

そっぴやぶつかった時も良い匂いがしたな。

うすく香水でもしているのだろうか。

「あのっ！ー！」

「は、はいっ！ー！」

いかん。ボーっとしてしまった。

「えと……。私の手帳、あなたが持つてるんですよね？」

「あ、ああ。うん。えっと……、一応確認するけど君の名前は？」

「千堂里佳といいます」

「うん。やっぱり君のだね。どうぞ」

「ありがとうございます。はあ、良かった」

千堂さんの顔に安堵がひろがる。少し上がり気味だった肩もすうつと下がった。

やっぱり手帳をなくして困ってたんだな。

さて、俺も職員室に行かなくちゃ。職員室、職員室……。

「って場所がわかんないだった!」

「きゃっ!ど、どうしたんですか?」

俺が突然声を上げたので驚かせてしまったようだ。

心の中で謝っておきます。ごめんなさい。

「あ、ごめん。うん、俺、転校生なんだけど職員室はどこかなって」

心の中だけで謝るつもりだったのにホントに謝ってしまった。

俺って律儀だな。

「転校生?じゃあ、あなたが噂の荻野裕樹さんですか?」

「そうだけど……って、噂!?もう俺のこと広まってんの?」

「はい。なんでも世界史と政経はほぼ満点を取ったって」

「や、あれは運が良かったただだったから……」

とは言いつつも、実は俺は社会が得意で模試では常に上位5位には入るのだ。

俺は人より記憶力が良いと自負している。

あれは覚える教科だから他と比べて点を取りやすい。

もつともグラフ問題とかの応用問題みたいなのもあるが。

まあ、とにかく人に自慢するのは好きではないので運のおかげにしておく。

「英語も90点くらいだったらしいですよ?」

「た、たまたま取れたただだよ」

「でも、ここの編入試験はとても難しいらしいですよ?」

「た、たまたま……」

「数学は駄目だったみたいですけどね」

「あー。数学は苦手だから。小学校でも算数はできなかったなあ」

そうなのだ。記憶力が良い反動なのか、計算は人より苦手だ。

特に一年生の途中で習った三角関数というのは、俺史上で最悪極ま

りない代物だった。

解いているだけで吐き気をもたらすあの記号は二度と見たくない。
ってゆうか、何で俺の点数が漏れてるのだろうか？俺も知らなかったのに。

しかし彼女はよく喋る人なのか、俺が珍しいからなのか質問が多い。
見た感じは物静かな印象なんだがな。

「テストの点もあれですし、やっぱり文系ですか？」

「ああ。数学は死んでるからな。三角関数とか意味不明だ。君も文系か？」

「いえ、私は理系です。英語とかさっぱりで」

これはまた意外だった。見た感じ文系なのだが……。

まあ女子でも理系の子たまにいるよな。

今時、女子〃文系という方程式は成り立たない。

まあ、昔はどんなのだったか知らないが。

……。

ん？なんだか話が脱線してないか？

って、そろそろ職員室だよ！職員室に行くんだった。

「あの、俺、もう職員室に行くので……」

「あ、すみませんでした。あの、良ければ案内しましょうか？」

「……いいのか？」

「生徒手帳のお礼ということだ」

「なるほど。じゃあ頼む」

「はい」

といって彼女はくるっと後ろを向いた。

顔の動きにつられて髪がふわっと回る。

「こっちです。ついてきてください」

「ああ」

さつきはありがとございました

「そういえば何年の方でしたか？」

「君と同じ2年生だけど」

「あ、そうなんですか。あれ？私、自分の学年言いました？」

「生徒手帳に書いてあった」

ちよつと意地悪に俺が言うとな彼女は「うう」と言つて、小さくなつた。

「あ、そうそう。同学年なんだから敬語は止めにしない？」

「でも私、他の皆にも敬語使ってますよ？それだと荻野さんだけ特別になつてしまいます」

そんなの嫌ですよ的なニュアンスを含んだ言葉にちよつぴり傷ついた。

「わかった。敬語はいいから、荻野さんっていうのは止めてくれ」

「文句の多い人ですね。なんと呼べばいいんですか？」

なんかだんだん態度にトゲがでてきてない？

俺の気のせいだろうか。

「裕樹でいい」

「裕樹………さん？」

「まあ、その辺でいこう。俺も里佳さんと呼んでいいか？」

「いいですよ」

里佳さんがにこつと笑った。

しかも、とびっきりの笑顔で。それは反則だろ。

なんだかんだで彼女は愛想が良い。

それは媚びたものではなく、彼女の自然体だ。

きつと友達とか多いだろうな。

彼女を好きな輩も少なくは無いはず。

まあ、今の俺にはどうでもいいことだがな。

そんなことを考えていると、ふと別の人の顔が浮かんた。

「——きさん。裕樹さんってば！」

「は、はい！何でしょうか」

「どうしたんですか、ボーっとしちゃって？一瞬口調も変わっちゃってましたよ」

「いや、何でもない。……ただ緊張してるだけだ」

「そうでしたか。裕樹さんが緊張してる間に着きましたよ」

「……は？たどり着いた？」

顔を上げると、そこには『職員室』と書かれたプレートがあった。

いつの間にか里佳さんのナビゲートは終了していた。

「ここが職員室です。もう迷わずに来れますか？」

「……」

「まあ、なんとかかりますよ」

我ながら情けないというか。

だが、方向音痴じゃない奴等は一体どんな感覚してんだ？

一度通った道なら迷わないのだろうか。

記憶力は良いはずなんだが、何故か道を覚えられない俺だった。

方向音痴とそうでない人の境は一体どこにあるのだろう。

「ところで、裕樹さんは何組ですか？私は4組です。」

「いや、まだ俺にも分からないんだ」

「そうですか。同じ組になれるといいですね」

嬉しいこと言ってくれるじゃないの。

そんな台詞を言われては勘違いをする輩もいるはず。

きつと里佳さんは何気ない言動で他人を虜にしてるのだろう。

「まあ、同じクラスになれるといいな。じゃあ案内ありがと」

「はい。どういたしまして」

と言って彼女は踵を返した。自分のクラスに戻っていくのだろうか。

里佳さんか……。俺も4組になれないかな。

まあともかく、さつさと職員室に入るか。

ガラガラガラっと戸をスライドさせる。

「失礼します」

職員室に入った途端、コーヒーの匂いがした。

さて、俺の担任はどの先生だったか……。

名前は確か葛木って言ってたな。その辺の先生に訊いてみよう。

「すみません、葛木先生はいますか？」

「というわけで、ここが君の教室だ」

職員室でいくつかのやりとりを済ませた後、先生と一緒に教室に来了た。

てゆうか、まさか声をかけた先生が葛木先生本人だったとはな。

手続きの時に担任になると言われたのに、顔をすっかり忘れていた。

ごめんよ葛木先生、と心の中で謝罪。

「では少し待ってなさい。しばらくして私が呼ぶから入ってきてくれ」

「わかりました」

と俺が言つと先生は教室に入っていく。

俺の教室は4組。つまり里佳さんと同じクラスだ。

まさか本当に一緒のクラスになるとはな。

あの顔を毎日見られるんだ。そう考えただけで少し顔が緩んでくる。

やはり今日は気分がハイになってるのだろう。

いつにも増して心臓は活動が活発だ。

いつそのこと早く呼ばれないだろうか……。その方がいいかもしれん。

「荻野ー、入ってきなさい」

お。グッドタイミング！ナイス葛木先生。

教室の戸を開けて中に入ると約40人の視線が俺に集まる。

まあ普通の人ならここで緊張するんだよな。

だが、俺には何のことはない。伊達に転勤族をやってなかったぜ。

教壇の所で立ち止まって、教室を見渡す。

「えー、この九月から編入することになった荻野裕樹君だ」

先生の言葉に合わせて軽くおじぎをして顔を上げる。

と、視界に里佳さんの顔が目に入った。

それに気づいてか里佳さんはスマイル。

俺もスマイル………できないだろこの状況じゃあ。

「では荻野、軽く自己紹介しろ」

「はい。荻野裕樹です。引越して間もないので分からないことが多いと思いますので、色々とよろしくお願いします」

まあ、自己紹介はこんなもんだな。これも何回も繰り返したことだ。

「うむ。では委員長と副委員長は立ってくれ」

先生が言つと二人の生徒が立った。

一人は男だ。スラッとした体格だが軟弱さを感じない。

その立ち方が堂々としているからだろうか。

そしてもう一人は………里佳さんだ。

あなた、実はそんな役職に就いていたのね。

道理で面倒見が良いわけだ。自分から進んで案内を申し出てきたしな。

「男のほうおおはらかずやが委員長の大原一也。女のほうおおはらかずやが副委員長の千堂里佳だ。何かわからないことがあったら彼等に訊いてくれ」

「はい、わかりました。えっと、よろしくお願いします」

「おう」

大原君の返事が返ってくる。

答え方からしてなかなか気さくそうな奴だ。

「よろしく願います、裕樹さん。さっきはありがとうございました」

里佳さんの思わぬ発言に教室が少しざわついた。

余計な爆弾をわざわざ投下してくれやがりましたね。

てか、里佳さんや。別に今言わなくても良かったんじゃないですか？

もうちょっと空気読もうよ……。

「おお、荻野と千堂はもう知り合いなのか？なら席を隣にしてやろう」

葛木先生の計らいにより里佳さんの隣の人が俺の予定席に移動する。

あのー。別に余計なことしないでいいんですよ？

「じゃあ荻野、千堂の隣の席へ行け」

「はい」

席に向かって歩いていくと、周りの視線も俺を追う。

たどり着くと、同じクラスになったねと里佳さんが小声で話しかけてきた。

俺も小さく、ああと返す。

「つといかん。ホームルームそろそろ終わろう。委員長」

「起立、……礼」

礼をすると同時に皆が一斉に俺のもとに来る。

まあ、質問攻めは転校生の宿命なわけだが今回は……。

「千堂さんといつ知り合ったの？」

ついさっき廊下で。

「もしかして登校中にパン食べながらぶつかったとか！？」

あ、惜しい。廊下でぶつかったただけだ。

「まさか二人は恋人か！？」

んな訳ねーだろ。絶対わざと訊いてるな。

クラスに一人はいるんだよな、こういう奴って。

いつもなら「どこから来たの？」とかなのに、恨むぞ里佳さん。

ふっと里佳さんのほうを見ると、ごめんねって顔をしている。

そんな顔もかわいいんだよな。怒る気にもなれん。

「こらー！千堂さんに見惚れるなー！質問に答えろー！」

そろそろ解放してくれないかな、これ。誰か助けてくれ……。

慣れているはずの質問攻めだが、里佳さんのせいで趣旨が変わった質問攻めに

俺はうんざりしてきた。

「質問攻めはその辺で終わりや」

どこからかそんな声が聞こえた。

振り向くと委員長、もとい大原君が悠然と立っていた。

「ロングHRまで後10分あるわ。それまでにやることあんで一緒に来てくれ」

「ああ。わかった。ってことで皆、また今度ね」

大原君のナイスな助け舟によって脱出できた。

しかし彼の用事って何ぞや？

「さて、この辺でええやろ」

大原君は独り言のようにつぶやく。

っていうか、この辺でいいってどういうこと？

「あの、それでやることっていうのは？」

「ああ。そんなもん最初から無いで」

なあんだ。用事なんて最初から無かったのか。

……………
っておいおいおい。

「はあ？じゃあ何でここまで連れてきたんだ？」

「あんたが困った顔をしてたでや。委員長として助けてやったってところやな」

大原君。君はなんて素晴らしい人なんだ。

ところで、全然関係ないがこの口調は関西人なのだろうか？

なんだかところどころなま訛りがある。

「そうだったのか。正直助かったよ、ありがとうな大原君」

「一也でええわ。俺もあんたを裕樹と呼ぶわ」

結構気さくな奴だな。流石は委員長だ。

っていうよりやはり関西人なのだろうか。

一般論だが関西人は気さくでノリがいいと聞く。

そして、目の前のこいつもなかなか気さくで能天気そうな奴ではある。

「能天気はいささか失礼か……」

「ん？何か言ったか？」

「あ、いや、なんでもない」

どうやらうつかり口に出してしまっていたらしい。

あぶないあぶない。

「で、なんであんたは千堂と知り合いなんや？」

結局それは訊いてくるのね……。

まあ、助けてもらったことだし、答えてやるか。

「実は職員室を探していたら彼女とぶつかってな。それで案内してもらったんだよ」

「そうやったんか。ほやけど、何で千堂はありがとうってたんや？」

顔をかしげる一也。ちょっと説明がハシヨリ過ぎたか。

「ああ、実は登校中に彼女の生徒手帳を拾ったんだ。そしてぶつかったときに返した」

「なるほど。まるで漫画みたいな出会いやな」

「そうだな。ところで一也、お前は関西人なのか？」

「ん？ああ、まあな……。それよりそろそろ戻ったほうがええ頃合やな」

ケータイで時計を見ると授業まであと二分だった。

俺たちは少し話をしながら教室に戻った。

「あ、裕樹さん！どこ行つてたんですか！あれから私が質問攻めだつたんですよ？」

席に着くやいなや里佳さんはご機嫌斜めだった。

つてゆうかそれは俺のせいなのか？

「いや、ていうかあれは自分で撒いた種だろ？俺には関係ねえ！」

「そのネタ、かなり古いですよ？」

「そんなこと言つたら可哀相じゃないか。とにかく俺は知らん！」

「うう。もういいです」

里佳さんがイジけてしまった。

なんというか子供っぽいところもあるんだな。

彼女を見ていると礼儀正しく、品行も良いので大人っぽく感じていた。

しかし、目の前の彼女は精神年齢が少しばかり下がっているように思える。

ガラガラガラガラッ！！

教室の戸を開ける音で俺の思考は遮られた。

どうやら葛木先生が入ってきたようだ。

「よっしゃ、席につけー」

生徒が席に着くと葛木先生は紙に書かれたことを目で追いながら皆にしゃべっている。

なんというか。もうちょっとアドリブはきかないのか？

アドリブ…アドリブ……。

そっぴゃアドリブって語源はなんだろうか。

なんだか微妙に気になってきた。

アドとリブで分けるのだろうか。アド…アド………アドレスか？

なんだか如何にもって感じがする。メアドとか言っしな。

ということはアドは『住所』だ。

すると残ったリブは……『live』か？

日本語にすると『住む』だな。

なかなか良い線いってるのではなからうか。

「あの、裕樹さん」

なんだか呼ばれた気がしたが、ハイレベルな思考に耽っていてそれどころではなかった。

言葉の意味の追究というのは難易度が極めて高い。

夏休みという長期の休暇を経てタルンできた脳を活性化するにはもってこいだ。

現にいまの俺の脳は研ぎ澄まされた刀のような鋭さだ。

数学などを解いているときは全く比べ物にならないだろう。

こうなった俺は何人たりとも止められない。

さて何だったか？

そうだアドリブについてだ。

アドが『住所』で、リブが『住む』か。

なんだか深い関係を持っているじゃないか。

だが、1つ重大な疑問がある。

アドリブが『住所』『住む』を指すのだとしたら、何故『即興でやる』という意味になるのだろう。

かなり謎過ぎる。

つんつん

不意にシャーペンで肩をつつかれ、何事かと里佳さんを見る。

なんだか挙動不審というか、なんだか落ち着いていない。

具合でも悪いのだろうか。

「さつきから先生に呼ばれてますよ」

「……は？先生？」

ふと教壇のほうを見ると葛木先生がこちらを睨んでいる。

クラスの皆の視線も何故か俺が独占していた。

『いたたまれない』というのはまさにこの状況を指す言葉だろう。

ものすごく居心地が悪かった。

「荻野。転校生ならちゃんと先生の話を聞こうな」

「……はい、すみませんでした」

「始業式は出席番号順だがお前は転校生だから最後尾だ。以上」

別に言われなくても生徒手帳には41番と書いてあったので容易に想像できただろう。

まったく余計なことをしてくれた気がする。

もはや完全に八つ当たりだが、そうでもしないと心が折れそうだった。

始業式やら大掃除やらが終わって放課後だ。

「これからカラオケ行く？」とかそんな台詞が聞こえてくる。

時刻はまだ11時だ。いわゆる半ドンってやつである。

まあ現在ではあまり聞かない言葉だが。

そついうわけで、このまま帰るのが暇だからどこかに寄る生徒も多い。

俺も日常品を買わなければならない。

いつも夢みた一人暮らしはそれほど良いものではない。

トイレットペーパーやシャンプーなど細かいものも自分で調達せざるを得ないのだ。

物は手帳にメモってあるから何が足りないのかは分かる。

俺はスーパーなどで買い物をしてから帰路についた。

自分の部屋のドアを開けると、静けさだけが漂っていた。

カバンをソファの上にポイツと投げて、台所に行き冷蔵庫を開ける。

買出し品をしまってから、コーラを取り出して一気飲み。

ゴクッゴクッゴクッゴク！

……ぶっはあ。いやはや、帰宅後のコーラは実に美味い。

まるで俺の中の細胞が全て活気付けられたような感じがする。

炭酸のもたらす効果は絶大だった。

適当に昼飯を済ませて時計を見るとまだ1時だった。

明日の時間割をとつとと終えると、いきなりすることが無くなってしまった。

「昼寝でもするか……」

コーラによってせつかく活発になったにもかかわらず寝ることにした。

ベットに体を預けて、目を閉じた。

今日あった色々なことが頭の中を駆け巡る。

新しい学校、一也、そして里佳さん。

……かわいかったな。

あ、もちろん一也じゃなくて里佳さんのことだけだな。

なんだか楽しくなるような予感がしてわくわくした。

だが、それ以上に疲れていたらしく、俺はいつの間にか寝息を立てていた。

うつすらと目が開いた。

視界がゆっくりと曖昧なものからクリアーになってくる。

どうやら俺は寝ていたようだ。時計を見ると5時半だった。軽く4時間ぐらいいは眠っていたらしい。

ボーっとしながら台所に行き、コーラをコップに注いで一気飲み。

夕飯に冷凍ピラフを食べて、今日の分の食器を洗う。

と言っても、食器洗い機があるので俺がやるわけではない。

俺のやることは食器をその中に入れて、洗剤も入れて、スイッチON。

後は機械が洗淨から乾燥まで全てやってくれる。

なんともまあ、便利な世の中になったものですな。かのエジソンもびつくりの現代である。

適当に風呂をすませてベットに寝ころがる。

何をするわけでもなく、天井をぼんやり見ていた。

昼間たっぷり寝たせいで当然眠気は来ない。

こんなときは小説でも読んで時間を過ごす。

もつとも、はまり過ぎると余計に寝れなくなるときもあるが。

そんな時は悲惨な目覚めを約束されることになる。

だが、いつの間にか俺は、文庫本を片手に寝息をたてていた。

また暇なときはよろしくね

ジリリリリリリリリリリリッ！！

鬱陶しいことこの上ない目覚ましの音は無情にも俺に語りかけてくる。

人間語に訳すなら『さつさと起きんかコラァ！』ぐらいだろうか。

心なしかいつも以上にやかましく感じる。

だが今日の俺はとてつもなく眠い。

とにかく眠い。

起きようとしなかった。

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリッ！！

だが目覚ましも負けてはいない。

奴は鳴り出すと1分ぐらい鳴り続ける。

問題はその後なのだ。

いったん鳴り止んで油断させた後、その5分後にまた騒音を再開す

る。

スヌーズ機能というやつだ。

巧みな時間差攻撃を駆使して俺の精神をじりじりと削りやがる。

とにかくうるさい。

俺は布団の中に埋もれたまま時計に手を伸ばす。

視覚を使わず触覚だけで奴を見つけようと試みた。

しかし、いつまで経っても指先にはあの感触が感じられない。

「ぬう」

もうちょっと手を伸ばしてみた。

だが、健闘むなしくフローリングの床の少し埃っぽい感覚しか伝わってこない。

「ぐぐぐぐ………」

こうなったら意地でも手を伸ばす。

死にもの狂いで、腕が外れるのではないかという限界まで頑張ってみた。

起きて目覚ましを止めることは簡単だ。

しかしそれをやっては俺のプライドが我慢ならなかった。

人間、意地を張るといふことも大切なのだ。

肩を軸に腕を車のワイパーのごとく左右に振ってみた。

と、指先が何かしらの物体に触れる。

このとき俺は勝利を確信した。

ガチャリ。

そうしてやつは静かになった。

勝った！

思わずニヤリと笑みがこぼれる。

嬉しさのあまり、なんだか目が冴えてしまったので結局起きることにした。

いつ如何なるときでも勝利というのは心地良いものだ。

妙な満足感を抱きながら机においてある手帳を手にとって開く。

今日から平常の授業が始まる。

しかも、よりによって俺の大嫌いな数学からだ。

鬱陶しいこと極まりない。

何で文系の俺があんなものを解くのに朝から労力を使わなければならないのか。

考えていると嫌な気分になるので、さっさと準備を済ませて、飯を作ることにした。

「今日はスクランブルエッグにしようかな」

俺が作れる数少ない料理の内の一つだ。

あとは目玉焼きとインスタントラーメンしか作れない。

ていうより、それしか作ったことがない。

よくもまあこんなスキルで一人暮らしをするといったもんだ。

自分のあまりの無謀さに、むしろ感心する。

半熟加減が無駄に上手くなったスクランブルエッグを黙々と食べながら、目え覚ませテレビを見ていた。

アナウンサーの人がニュースを読み上げている。

前々から疑問だったのだが、女子アナが『。。。ぱん』というニックネームを付けられるのは何故だろうか。

いまいち理由が不可解である。

その問いに誰が答えるワケでもなかったので、俺は箸を進めた。

『次のニュースです。昨夜、おぎの ゆうき氏が痴漢の疑いで逮捕されました』

動揺のあまり、箸を落とした。

「俺の偽者出現!？」

ドッペルゲンガーという言葉が頭に浮かぶ。

そんなわけがないと思いながらも、心拍数は一回り大きくなる。

固唾を呑み込んでモニターのテロップを凝視した。

『政治家、小木野 祐希氏が電車で……』

心の底から安堵した。

同じ読み方でも字が違ふのね。

まったく脅かせやがって。心臓が止まるかと思つたわ！

床に転がつている箸を拾い上げ、台所へ水洗い。

タオルで拭き取り、気を取り直して食事を平らげた。

当然だが飯を終えたら歯をみがく。

俺は食後にやらないと気がすまない。

朝食を食べる前に歯をみがく奴がいるのは何故だろうか？

何のための歯みがきだと思えてならない。

汚れを落とすための行為なのに、それでは本末転倒である。

大体みがいた後に食べる飯って不味くないのか？

ふと、時計を見るとまだ8時きっかりだった。

「ちょっと早いが、行こうかな」

玄関を出て鍵をがちゃりと掛ける。

空はうつすら雲があるくらいで、うんざりするほど晴れていた。

まだまだ夏は終わってくれないらしい。

早く秋らしくなってほしいものだ。

「いいか！？sinの加法定理というモノはだなあ……」

1限目からの数学は苦痛より他ならない。

しかも、よりによって俺の大嫌いな三角関数から始まるという惨劇が用意されていた。

俺の精神力は、またたく間に削られていく。

朝のドッペルゲンガー疑惑に上乘せして疲労が蓄積しつつある。

さっさと終わらないだろうか。

黒板の上方にある時計をしてみる。

この時間だけで既に4回も見たというのに、まだ15分しか経っていないかった。

50 - 15 = 35分

そんな小学生低学年レベルの計算で残り時間を算出したら、げんなりしてきた。

まだ35分もあるのかよ……。

コッソ

不意に左側頭部に軽い衝撃を感じた。

机の上に何かがポトリと音をたてて落ちた。

紙くずのようだ。

俺の席は最後列だから先生も他の生徒も気づかない。

里佳さんは俺の右隣だから、彼女ではない。

誰だろうと思いつつ視線を左に移す。

「クスッ……」

左隣の女の子が笑っていた。

腰ぐらいまである長い髪にパツチリとした目。

どこかのモデルでもやってそうな人だった。

隣人観察を止めて丸まった紙くずを拡げる。

『こんにちは。あたし、一之瀬^{いちのせ}紫苑^{しおん}っていう名前なの。シオンって呼んでね、転校生君』

くしゃくしゃの紙にはそう書かれていた。

手紙をもらったら返すのが礼儀というもの。

俺は律儀にも彼女への返信を書く。

『俺の名前は裕樹だ。』 荻野 転校生 ”ではない』

少々の皮肉を交えて書き殴り、折りたたんで左に投げた。

彼女は机に落ちた紙を拡げて読むと、またクスッと笑った。

『君って面白いね』

『失礼な人だな。っていうか、いきなり何なのこれ？』

『君、数学は嫌そうじゃない？暇だから相手になって』

『勉強に勤しみなさい』

『だって面倒だもん』

『それならそれで俺を巻き込むな』

『数学嫌いなんですよ？』

『否定はしないが暇つぶしなら他をあたってくれ』

『ケチー』

『はいはい分かった。何をするんだ？』

『お、では質問！里佳とはどんな関係？』

『その質問は聞き飽きた』

『だって里佳はただ廊下でぶつかったただけって言うんだもん』

『全くその通りなんだが』

『そうなの？つまらないなあ』

『そんなこと言われても知らんわ！』

俺が紙を返した途端に授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

いつのまにか、そんなに時間が経ってたのか。

「きりーつ。礼」

一也はしっかりと委員長をしていた。

礼をして数学の先生が教室をさっさと出ていく。

それと同時に紫苑さんが俺に喋りかけてきた。

「ありがとねー、裕樹君」

「いや、こっちも助かった」

「また暇なときはよろしくね」

そう言って彼女は教室を出て行った。

その後姿に俺は思わず見惚れてしまった。

「裕樹さん」

「おわ！な、なんだ里佳さんか」

「なんだとは失礼ですね。それはそうと紫苑さんともう仲良くなったんですか？」

「うーん。仲良くなったというか、暇つぶしに付き合わされたただけだ。里佳さんは彼女とよく話すのか？」

「はい。お昼とかも一緒に食べたりするんです」

「へえ」

「あ、2限目は英語なんです。それですね……」

里佳さんは言いづらいのか口籠もる。

俺は彼女が最後まできちんと言うのを待った。

「裕樹さんって英語得意ですよね？」

「まあ、数学よりは」

「私、この訳が当たるんですけど分かりますか？」

「どれどれ」

問題を解決すべく、彼女のテキストを拝借する。

数ある英文のうち1つだけマーカーでアンダーラインがしてあった。

『No one is born stupid.』

それは短い英語だが、確かに少し和訳しづらい。

だが、俺は割りとすんなり答えをはじき出すことができた。

「生まれつき馬鹿な人はいない、ぐらいかな」

「なるほど。流石は文系です」

「俺も文系なんやけど、さっぱりやったわ」

どこからともなく関西弁が聞こえてきた。

「こっちや」

声とともに後ろから肩にポンと手を置かれた。

振り向くと案の定、一也がいた。

「一也さんも解けなかったんですか……。では流石は裕樹さんと言っておきましょう」

「俺の頭はそんな上等なもんじゃないぞ」

「今の発言は俺を敵に回したで」

一也が恨めしそうな顔で俺を睨んでくる。

心なしか彼の周りに負のオーラが出ている気がした。

その妙な迫力に圧倒される。

なんとか話題をそらさなくては……。

「そっぴや、さっき紫苑さんて人と話をしたぞ」

とつさに彼女とのやり取りを思い出して一也に話した。

「ふうん。そうでつか……」

だが、一也はつまらなさそうに返事をした。

失敗したかと思い、また必死で他の話題を頭のなかに巡らす。

「じゃあ、自分の席に戻るわ」

そう言つて、一也は言葉通り自分の席に戻つていった。

なんだか様子が変だ。一体どうしたのだろう。

キンコンカンコンコン！

授業開始の合図が鳴った。

その瞬間、英語の先生がガラガラと教室の戸を開けた。

「ほいじゃあ、席に着けー」

なんだかいいですね。そついつのつて

四限目が終わって昼休みに突入。

というわけで学食に行きたい俺なのだが、はたして場所はどこなのか。

途方に暮れていた時、一也と里佳さんが俺に話しかけてきた。

「おーい裕樹、昼飯はどうすんのや？」

「良ければ一緒に学食に行きませんか？」

どうやら二人は委員長、副委員長として気遣ってくれているらしい。

「もしかして二人とも俺のために学食にしてくれたのか？」

そう思っただけに口にした。

もしそうだとしたら、なんだか申し訳ない。

「私たちは最初から学食派なので心配は無用ですよ」

「そついつこつちゃ。お前は場所分らんやろなと思って誘ったんや。で、どうするん？」

「じゃあ、ありがたく案内されることにしようかな」

「ここが食堂です」

「なかなかええ所やろ？」

「ああ。確かに凄いな」

まず驚いたのはその広さだ。

もしかしたら生徒全員が座れるのではないだろうか。

加えてメニューの数もかなり多く、和洋中と一通りそろっている。

「どうやって買っただ？確か生徒手帳を使っただったよな？」

「トレイを持って列に並び、順番が回ってきたら注文します。そして料理を受け取り、手帳をICカードリーダーにかざすだけです」

「すごいな。この生徒手帳ICチップ積んであるのか」

何とか言われたとおりに注文して支払った。

俺は豚のしょうが焼き定食、里佳さんはスパゲティ、一也は好み

焼きを頼んだ。

「さて、空いている席はどこだ」

3人分座れる所はないかと見渡す。

すると隅のほうにちょうど3人座れるスペースがあった。

「あそこでいいんじゃないか？」

「あ、そうですね」

「そんなら取られんうちに行こか」

空いている席に着いたが、一応空席なのか聞いておこう。

「隣、空いているか？」

と、俺が聞いて飯を食べていた女が振り向く。

その見知った顔に俺は驚いた。

「紫苑さん！？」

「ん？お、偶然ね」

一也は紫苑さんにカズつちと呼ばれていた。

この二人は仲が良いのだろうか？

ていうかそもそも知り合いだったのか？

「裕樹さん」

「うん？」

「一也さんは紫苑さんの隣だそうですから、私たちは向かいの席に座りましょう」

「了解」

席につくと早速待ちに待った飯にありつく。

まずは一口。

パクッ！モグモグモグ。

「……美味しい！」

「そやる？ここの学食はこの学校の自慢なんや。学食目当てで入学する奴もいっぱいおるで」

そんなこと言ってる間にも、豚のしょうが焼きはどんどん減っていく。

「凄まじいまでの食欲だね」

「裕樹さん。もうちょっとゆっくりと食べたほうが……」

ガツガツガツガツ!!

横で何か言っているようだが、きれいさっぱり無視。

美味くて箸が止まらなかった。

その辺にあるレストランより美味しいのではないだろうか。

「んぐうつ!!!!」

急に喉につつかえてしまった。

どこかに水は無いのか!

胸の上辺りをドンドンと叩きながら、必死の想いで水を探す。

「ぐう、んんん!!」

「って、なにやってるんですか!水です!」

里佳さんから水をもらって無我夢中で水を飲む。

ゴクッゴクッゴクッ

「ぶはあゝ。し、死ぬかと思った」

「人の忠告を無視するからそうなるんです。でも、まさか本当にやってくれるとは驚きでしたが」

「面目ない」

「いやー、流石は里佳だね。いい嫁になるわ」

「よかったなあ、裕樹」

「何がよかったなあだ、コラ！」

「いや、でも結構みんな噂してんで」

「は？噂って？」

「里佳ってモテるからね。君が現れて外野も騒がしくなってるのよ」

「私はそんなにモテませんよ。紫苑さんのほうが人気あるじゃないですか」

改めて二人をよく見てみる。

里佳さんと紫苑さん。

タイプは違うが、二人はれっきとした美少女である。

心なしか、今も少し視線を感じる気がする。

美少女二人が揃って食事をしているのだ。

きっと気のせいではないだろう。

もしかして俺はかなり際どい位置にいるのではないか？

「裕樹さん。聞いてますか？」

急に呼ばれてハッと我に返る。

気がつけば里佳さんの顔が目と鼻の先にあった。

「おわっ！」

「ひゃあ！な、なんですかいきなり」

「う、ごめん。ちょっとびっくりして」

ふと一也のほうを見ると、声を殺して腹を抱えながら笑っていた。

あいつめ……。

「それでどうするんですか？」

「どうするって？」

「やっぱり聞いてなかったんですね。放課後、裕樹さんの歓迎会にカラオケにでも行かないかと紫苑さんが……」

「いいよね？」

笑顔満載で訊かれる。

ここで俺には断るという選択肢は無いのだろう。

まったくズルイ笑顔である。

「分かった」

「やったね！裕樹君の歌が楽しみー」

「おい。あんまり期待されると困るんだが」

「カラオケは普段行かないのですか？」

「行くには行くが、偏ったアーティストで90年代の曲がほとんどだ。ちなみに前回の最高は89点だったかな」

「お、なかなかやないか。じゃあ俺と勝負や。負けたほうがカラオケ代を奢る、でどうや？」

「何で俺の歓迎会で俺が奢らなくちゃならんだ！」

「なんや？負けるんが怖いんか？」

その言葉にカチンときた。

はっきり言って俺は負けず嫌いだ。

ここで身を引くことは俺のプライドが許さない。

「いいだろう。挑んだことを後悔させてやる」

「望むとこや。絶対に負けへん！」

というわけで今俺たちはカラオケにいる。

「まずは主役の裕樹君からよね」

そう言つて紫苑さんはナビを渡してきた。

さて、何を歌おうかな……。

迷った挙句、俺は『Field of view』の曲を歌うことにした。

そのなかでも『ドラゴンボ・ルGT』で使われたあの曲をセレクト。

「これまた懐メロだねえ」

「そういえばこの曲はヒットしましたね」

「なかなかのチョイスやないか。お手前見せてもらおか」

それぞれ何か言っているが、俺はそれどころではない。

かなり緊張してきた。

マイクを持つ手が軽くプルプルと震えている。

果たして上手く歌えるだろうか。

最初は確か……。

「~~~~~」

……

……

…

曲の1番が終わる。

久しぶりだったが、なんとか歌えた気がする。

「なかなか上手いやないか！俺、燃えてきたで」

「やるね、裕樹君」

「結構すごかったです」

「そりゃどうも」

ここまで言われると照れるな。

だが、褒められると結構嬉しいものだ。

思わず頬をポリポリと搔いてしまう。

……っといかんいかん。

もうすぐ2番が始まってしまう。

すかさずマイクを構えてまた歌い始める。

「~~~~~」

………

……

…

『今回のあなたの点は……』

皆が息を吞んで俺の点数を待ち構える。

何点取れたのだろうか。

『90点だあー！スゴいぞー！』

「よっしゃあ！」

「むむむ……」

「ほー」

「やりますね」

俺の自己新記録が更新された。今日は調子が良いようだ。

ふっとテレビの画面が変わる。

「次は私ですね」

里佳さんの曲が流れ始めた。

どうやら季節モノのバラードのようだ。

彼女はマイクを持って歌い始めた。

「~~~~~」

これは上手い……。

里佳さんの優しい声が曲調とマッチしている。

流れるような声が心地よく耳に響く。

「里佳もうまいねえ」

「ああ。そうだな」

「ホンマやわ」

このバラードは結構レベルが高く難しい。

それをここまで歌えるのは彼女の腕が良いからなのだろう。

俺は彼女の歌に聞き惚れていた。

……

……

…

「ふう。裕樹さん、どうでしたか？」

「ああ。聞き惚れてたよ」

「そ、そうですか……」

俺が褒めると声を小さくして俯く里佳さん。

どうやら照れ隠しなのだろう。

『今回のあなたの得点は……』

俺の時と同じテロップが流れる。

聴いた感じからして高得点かもしれない。

『なんと95点だぁー！見事な歌唱力だったぁー！』

やっぱりな。

あっさりと抜かれてしまった。

しかし、このテロップ大げさすぎやしないか？

「流石里佳だね。あっさりと裕樹君を追い抜いちゃったよ」

「たまたまですよ」

「まあ、裕樹も遅れを取ってへんだけだな」

「そいつはありがとさん」

「それでは次いつてみよー」

紫苑さんがピツとりモコンを押すと次の曲に切り替わった。

「よっしゃあ。次は俺がいくでー」

「あと1点……。あと1点で負けたっちゅうんか」

「これが現実だよ、一也」

今の俺はご満悦だ。

一也との歌唱力勝負は僅か1点の差で勝ちを収めた。

もちろん俺の分のカラオケ代は一也が出した。

一也は91点を出して俺は一時抜かれたが、最後の最後で92点を叩き出した。

そのときの一也の顔は思い出ただけで笑えてくる。

「まあまあ、カズっち。次リベンジしろー」

バッチーーーーーン!!

「痛! な、なにすんねん、紫苑!」

「いつまでもウジウジしてるからよ」

「やりすぎじゃ、どアホ! 少しは手加減せんかい!」

「アホとはなんだアホとはー!」

「アホやない! どアホや!」

一也と紫苑さんはギャーギャーと叫んでいる。

だが本格的なケンカではない。

ケンカするほど仲が良い、という言葉があのだ二人には似合いそうだ。

思わず暖かい視線を送ってしまう。

「あの二人、いつもああなんですよ」

いつのまにか里佳さんは俺の隣にいた。

「よくケンカしてるんですけど、次の日には仲直りしてて……」

「あの二人って付き合ってるのか?」

「いえ。まだ付き合ってますが、そのうちたぶん」

「かもな」

「でも、なんだかいいですね。そういうのって」

「……そうでもないさ」

「え？何か言いましたか？」

「いや、なんでもない」

「そうですか」

「まただ……。またあのことを思い出してしまった。」

「何故だろうか？」

「最近よく脳裏をかすめるのだ。俺の初恋の人の、あの顔が。」

「めんね、困らせちゃって

それは3年前の事だった。

まだ転校は数回しかしていない頃。

俺が、とある中学校に通っていたときの話である。

「おはよう、ユーキ君」

「おはよう」

教室に入るといつも俺に挨拶してくる人がいる。

彼女の名前は『二宮楓』^{にのみや かえで}という。

この学校に編入してきて、席が隣になった人である。

クラスでもそこそこ人気があるらしい。

「でさ、昨日の約束、忘れてないよね？」

「ああ。弁当のことだろ？」

「ピンポン♪大正解！」

実は彼女が困っているところを助けたので、お礼にと俺の弁当を作ってもらったことになった。

女子の手作り弁当、それ即ち男子の夢である。

……。

まあ、そんな訳で今日の午前中の授業は上の空で全く集中できなかった。

だって女の子が俺に弁当作ってきてくれるんだよ？

そう考えただけで思わず顔が緩んでしまう。

楽しみだ。早く昼休みにならないかな。

バツシーン！！

そんな痛々しい効果音と共に、俺の頭はカクンと前倒れになる。

頭を本か何かで叩かれたような衝撃。

「荻野。ニヤニヤしてないで授業聞け」

「はい」

先生の一言でクラスの皆がクスクスと笑った。

めちゃくちゃ恥ずかしかった。

楓さんも口に手を当てて笑いを堪えていた。

待ちに待った昼休み。俺と楓さんは今屋上にいる。

もはや授業中にかいた恥のことなどすっかり忘れた。

目の前には楓さんの弁当がある。

定番の卵焼き、唐揚げ、ウィンナーなどなど。

「美味そうだな……」

「ユーキ君の為に作ってきたんだよ」

「今のセリフ、もう一回言って？」

「ユーキ君の為に作ってきたんだよ」

ジーーン。

嬉しいねえ。

かわいい子が弁当を”俺の為に”作ってくれる。

この”俺の為に”というのがポイントなんだよ。

男にとってこれほど嬉しいことは他に無いだろう。

「いただきます！」

卵焼きを一つ食べてみる。

少し半熟気味で、塩や砂糖の加減もバッチリだった。

「最高だよ」

「ホントに？そんなに美味しい？」

「ああ。めちゃくちゃ美味しい」

「えっと……。じゃあさ、これからも作ってこようか？」

「え、いいのか？大変だろ？」

「弁当の場合は0から1になるのは大変だけど、1から2になるのはそんなに変わらないよ」

「うーん。じゃあお願いしようかな」

「うん、まかせて」

そう言って彼女は微笑んだ。

トクン！

不意に胸が高鳴りした。

今思えば、まさにこの瞬間だったのかもしれない。

俺がこの人に恋をしてしまったのは……。

——放課後。

俺たちはゲーセンにいた。

楓さんは前から来てみたかったらしいが、一人では来づらかったらしい。

そんなワケで彼女に誘われたのだ。

「うわあ。ゲームセンターってうるさいね」

「まあな。しかし慣れると全く気にならない」

「そんなもんかな？」

「そんなもんだ」

さて、楓さんにもできそうなモノは何かないか。

歩きながら色々と探してみる。

「ねえユーキ君。あの台はなに？」

「うん？ああ、あれはエアホッケーっていうんだ。横に置いてある奴で円板を相手のゴールにぶち込んで点が高かった方が勝ち」

解説をして気づいたが、これなら彼女も出来るかもしれない。

「試しにやってみるか？」

「うん！」

……

……

…

「あっはっはっはっ！」

「……………」

「ご、ごめんねユーキ君。でもっ笑いが止まらないよ……っぷくくく」

楓さんは大爆笑していた。

彼女はエア－ホッケーが初めてだったにもかかわらず、なかなか熱戦になった。

そこまでは良かったのだが、最後に俺が打ち返した円板が宙を舞い、自分の顔に直撃した。

正直言ってかなり痛い。

なんとか涙は堪えたものの、おでこが真っ赤である。

そんな俺を見て、彼女は大笑いしているのである。

「いいかげん笑うの止めんか!」

「だ、だつてさ。っく、あはははは」

笑いすぎたせいなのだろう、彼女は涙目になっている。

泣きたいのはこっちなのに酷い話である。

それから俺たちはクレーンキャッチャーをしたりメダルゲームをしたりと満喫した。

お金もそろそろ少なくなってきた、帰ろうと彼女に言おうとしたが、彼女は何かをじっと見ていた。

「何見てるんだ？」

「いや、ゲームセンターにもプリクラがあるんだなと」

「プリクラ？何だそれ？」

「え、知らないの？まあ、簡単に言うと写真＋シールって感じかな」

「これはそんな機械だったのか。全く知らなかった」

「撮ってみない？」

尋ねてきたくせに、返事を待たずして彼女は俺を機械のなかに押し込んだ。

設定とかが全然わからないので彼女がやってくれた。

流石に派手なフレームは嫌だったので、スタンダードなやつを選んでもらう。

「じゃあ撮るよ、ポチっとな」

楓さんはそう言ってボタンを押すとカウントダウンが始まる。

3…2…1…カシャッ

2回も撮られた後、印刷して出てくるのを待つ。

なんだか証明写真みたいな機械だなと思いつつ、出てきたプリクラなるものを見てみる。

親指ぐらい小さい写真がいっぱいでてきた。

「お！上手く撮れてるねー」

俺と楓さんは写真の中で笑っている。

こついうのも、なんだかいいもんだな。

しかし、これじゃまるで俺たちが恋人みたいだな……。

俺と楓さんはアイスを食べながら並んで帰宅していた。

彼女の家は俺のマンションのすぐ近くだった。

「いやー、楽しかったね。一番はやっぱホッケーだったよ」

「その話はやめてくれ」

「はい。ね、また今度行こうよ！」

「ああ」

楓さんも楽しんでくれたようで良かった。

しばらくはゲーセンの話だったが、いつの間にか話題はあれこれ変わっていく。

「それにしても今日の授業は大変だったな。数学が3限もある日なんて、そうそうないぞ」

「時間割変更するにしてもひどいよね」

「まったくだ」

俺たちは二人そろって数学が嫌いだった。

今やっている相似とかは意味がさっぱり分からない。

ただ図形の大きさが違うというだけなのに、それが一体なんなのか。
用途が謎な分野である。

「でも明日は数学ないから楽だよ」

「そうだな」

長々と続いた会話だったとその一言で止まってしまった。
だが、しばらくしてその静寂は楓さんによって破られた。

「ねえユーキ君」

「なんだ？」

「ユーキ君家って引越し多いの？」

「どうだろうな。今のところ2回目だけど」

「ふーん……。すぐには引越しさないよね？」

どうして彼女はそんなことを訊くのだろうか。

「ああ。引っ越さないよ」

「そっか。あたしはこっちの道だからまた明日ね」

「おう。また明日」

手を振って彼女と別れる。

なんとなくその後ろ姿を見ていたが、少しして家に帰った。

「ただいまー」

「おかえり」

帰ると母さんがリビングから返事をした。

靴を脱ぐとすると、ある異変に気がついた。

父さんの靴がある。

つまり父さんは帰宅しているということになる。

だが、普段はいつも8時過ぎに帰ってくるはず。

今日に限ってどうしてもこんなに早いのだろうか。

まあ、どうでもいいか。

靴を脱いでリビングに向かう。

「おお。おかえり」

「ただいま父さん。今日は早いね」

「ああ。大事な話があつてな」

「話？」

「ああ。母さんも来てくれ」

父さんが呼ぶと、晩飯を作っていた母さんも作業を中断してリビングに来る。

3人そろってサイドテーブルを囲うように座った。

父さんは話をせずにただ俯いている。

「それで話ってなんなの？」

もったいぶっている父さんに母さんは質問した。

その言葉で腹をくくったのか、父さんは重い口を開いた。

「……二人にはすまないんだがな。また、転勤することになった」

「…………え？」

突然の通告に俺は言葉を失った。

「あらあ。まだ半年も経ってないのに？」

父さんが転勤する。

「ああ。本当にすまないと思っている。だが、上が決めたことには逆らえないんだよ」

それはつまり……。

「お仕事だから仕方ないわね」

俺も転校するということだ。

「そういうことなんだ。ごめんなみんな」

さつき楓さんと約束したのに……。

「いえ。私たちは大丈夫よ。ね？裕樹」

引越さないって約束したばかりなのに……！！

「裕樹？」

「え？」

「あんたも大丈夫よね？」

……。

……。

自室に戻った俺はベットに崩れこんだ。

結局俺は反対できないまま現在に至ってしまった。

もう何がなんだかって感じだった。

瞼を閉じると色んな言葉が頭のなかを乱雑にリフレインしてくる。

『すぐには引越さないよね？』

『すまないんだがな。また、転勤することになった』

『おはよう、ユーキ君』

『いえ。私たちは大丈夫よ。ね？裕樹』

うるさい……。

『いやー、楽しかったね』

『お仕事だから仕方ないわね』

『あたしはこっちの道だからまた明日ね』

『まだ半年も経ってないのに』

『ユーキ君ん家って引越し多いの?』

やめろ……。

『大事な話があつてな』

『じゃあさ、これからも作ってこようか?』

『すまないんだがな。また、転勤することになった』

『おはよう、ユーキ君』

『ユーキ君の為に作ってきたんだよ』

『ホントに?そんなに美味しい?』

『すぐには引越さないよね?』

『あっはっはっはっ!』

やめてくれ!!

気がつくとも俺は泣いていた。

水滴は頬を伝っていき枕元をぐっしりと濡らしていった。

ダメだ……。泣いちゃダメだ……。

そう思っても、奥のほうからとめどなく溢れてくる。

どうして、こうなったんだろう。

一体どうして。

いつしか俺は泣き疲れて眠っていた。

——数日後。

俺は一人、学校の屋上にいた。

この時間はまだ午前の授業すら終わっていない。

だが、もう俺にはそんなことは関係ない。

『もう一度聞くが本当に転校するんだな？』

『はい』

『そうか……。まあ親御さんの都合なら仕方ないな』

『すみません』

『お前が謝らなくてもいいだろ。世の中どうしようもないことはある』

『はい』

『次の学校は決まっているのか？』

『引越し先の近くの学校を受けようと思っています』

『ふむ。まあ、お前なら余程のところでない限り大丈夫だろう。がんばれよ』

『ありがとうございます』

『それでクラスの皆には言ったのか？』

『そのことですが、クラスには内緒にしてください。一部の人には伝えてありますから』

『わかった。お前の意思を尊重しよう』

一部の人には伝えてあると言ったが、それは嘘である。

誰にも転校すると伝えてなどいなかった。

もちろん楓さんにも……。

だからそのことを彼女に言いに来たのだ。

俺が好きになった唯一の人。

その人にだけは別れを言いたかった。

自分勝手だとは思って、そうでもしないとずっと後悔するだろう。

だから俺はずっと待ち続けている。

あと少しで4限目が終わる。

そうしたらきつと楓さんはこの場所に来る。

キンコーンカーンコーン

昼休みを告げるチャイムが鳴った。

下のほうから椅子をガタガタと動かす音が聞こえる。

もうすぐだ。別れのカウントダウンが始まった。

……。

……。

ギイイイッ！

屋上と屋内をつなぐ扉が開いた。

中から現れたのは……楓さんだった。

「ユーキ……君？」

俺を見るやいなや驚いた顔をする楓さん。

まあ、無理もないだろう。

ここ数日、俺は家の都合を名目として休んできた。

今朝も俺が欠席であることを先生が話したに違いない。

その俺が学校の屋上にいるのだから。

「久しぶりだな」

「やっと……来てくれたんだね」

「ああ。約束、守れなくてごめんな」

「ホントだよ。私ずっとお弁当作ってきたんだから」

彼女の手元を見るとお弁当が2つあった。

「お弁当作ってきたけど、ユーキ君は休みだつて先生に言われて……。そのお弁当は結局無駄になって……仕方なく捨てちゃった。次の日も作ってきたけど、また休みつて言われて……。その次の日も休みだつて……。家の用事だつて言われたから、ユーキ君のところに訊きにいけないったし」

聞いているのが辛かった。

楓さんはずっと、俺の弁当を作ってきてくれたのである。

俺との約束を果たすために何度も何度も。

そして今日も俺の為に弁当を持って屋上に来てくれた。

それなのに俺は約束を守ることができなかった。

「ねえ……。何で休んだの？」

「……………」

「教えてよ……ユーキ君。ねえ！」

楓さんは泣き出してしまった。

いや、違う。

俺が……泣かせたんだ。彼女を。

だから俺もちゃんと言わなければならない。

「俺……転校することになったんだ」

「え？」

泣きながら俺を見る楓さん。

彼女のその目は赤く充血している。

「なん……で？」

「……………」

「ユーキ君言ったじゃない。どこにも行かないって！」

「じめん」

「何で謝るのよ！どうして……どうしてあんな嘘ついたのよ………」

必死に俺を責める楓さん。

だが、最後のほうはだんだん声が小さくなっていく。

そして彼女は俯いてしまった。

彼女はきつと分かつてはくれないだろう。

だから、俺は心を鬼にしなければならぬ。

どうせもう、会うことはない……。

「何であんたがそんなにムキになるんだよ？俺たちは別に恋人でもなんでもないだろう？」

楓さんの体が俯いたままピクツと動いた。

とうとう言ってしまった……。

俺と楓さんとの間にあった何かが間違いなく壊れた。

手で目をこすってゆっくりと顔を上げる楓さん。

その顔は……なぜか……

……笑顔だった。

「そうだよ。私たちは別に恋人じゃないんだし……。ごめんね、困らせちゃって」

「……………」

「でもね。私はユーキ君のこと好きだったよ」

ズキンッ

その言葉に胸が痛んだ。

しかし、今の俺にはどうすることもできない。

転校しなくちゃならないんだよ……。

「何も言ってくれないんだね。今までありがとう。……そして、さよなら」

彼女は頭を下げてそう口にした。

顔を上げて振り向こうとする時、見えてしまった。

笑顔の裏にずっと隠れていた……悲しみの顔が。

手を伸ばしたかった。

俺も好きだよって言いたかった。

俺は一体何を間違えた？

どうして彼女をあんな顔にさせてしまった？

彼女のその顔は脳裏に強く焼きついてしまって、この先ずっと忘れることはなかった。

もう俺は……………恋なんてしない。

そう強く心に誓う。

「ああ。そっか……。恋をしたから駄目だったんだ。あのととき、彼女を好きになったのが間違いだったんだ」

ポケットから彼女とゲーセンで撮ったプリクラを取り出す。

俺はそれをビリビリに破って屋上から投げ捨てた。

何なんだろうな、あの人は

ガバッ！！

まるで体が勝手に動いたかのように跳ね起きた。

嫌な汗がつうつと流れる。

胸の鼓動もドクドクと耳に聞こえてくる。

「また……あの夢か」

一体この夢を見るのは何日ぶりだろうか。

楓さんと過ごした時の夢。

3年前はよく見ていたが、最近は全くだったのに……。

それがどうして今さら？

ふと里佳さんの顔が浮かんだ。

だが、頭を振ってそのビジョンを無理やり拭い去る。

……違う。そんなはずはない。

俺はあの時からずっと考えていた。どうしたら楓さんに許してもらえるかを。

そして俺は恋愛を自制することにした。

俺はもう二度と誰にも恋なんてしないと胸に誓ったんだ。

それが楓さんに対しての俺なりの償いだ。

確かに里佳さんはかわいい。

不意にドキツとすることもしばしばあった。

だが、ただそれだけだ。

この感情がそれ以上先へ進むことはない。

目覚まし時計の針は4時を示している。

外はまだ暗いようでカーテンの隙間からも光は漏れていない。

いくらなんでも起きるのには早すぎる時間だった。

「寝なおそう」

タオルケットをかぶり直して寝ようとするも、とっくに目は冴えてしまっていた。

本を読んでみても、内容は頭に入ってこない。

羊でも数えてみたが、全く効き目がないことが証明されただけだっ

た。

結局それから眠れないまま、窓の外は明るくなってしまった。

まぶたがピクピクと痙攣^{けいれん}している。

やはり睡眠時間が足りていないようだ。

加えて少し頭痛もする。

「まあ、学校には行けるかな」

きちんと戸締りは忘れず、家を出た。

学校までの道をトボトボと歩く。

多少は慣れてきたはずの道なのだが、いつもより確実に辛い。

早く学校に行って少しでも仮眠を取ったほうがいいかもな。

ちよつとキツイが歩くペースを上げる。

時間はまだ8時10分。学校に着けば20分ぐらいは寝れるだろう。
もう少しの辛抱だ。

……

……

…

教室の戸を開ける。

今の俺はそんな動作にも少し苦勞を要した。

中に入るとHRまで時間があるからか、生徒はまだ半分もいない。

とりあえず自分の席に着き、カバンを横にかけた。

それにしても身体がだるい。正直言ってかなりしんどい。

少し頭も痛くなってきた。

「おっす。おはようさん」

「……ああ」

「なんか眠そうやな。大丈夫なんか？」

「……ああ」

「そや！飴が少し余ってたんや。お前にやるわ」

「……ああ」

「オレンジ味とレモン味、どっちがええ？」

「……ああ」

「裕樹？」

「……ああ」

「おい」

「……ああ」

「これはアカンわ」

「……ああ」

「おはよう、かずつち。……あれ？なんか裕樹君ちょっとお疲れ気味？」

裕樹の視線は何かを見ているようで何も見ていなかった。

まだ知り合って間もないとはいえ、雰囲気ですぐには読みとれた。

「あいつ、さっきから何言っても『……ああ』しか答えへんねん」

「ふーん。ちょっと確かめてみよ」

「え？おい、紫苑？」

「裕樹君、おはよう」

「……ああ」

「今日、朝ごはん何食べた？」

「……ああ」

「裕樹君ってバカだよー」

「……ああ」

「なあ、紫苑。もう無理ちゃうか？」

「いいから黙ってて。里佳って可愛いよね？彼女にしたいよね？」

「……ああ」

「あたしって可愛いよね？彼女にしたいよね？」

「……ああ」

「かずつちつてカッコいいよね？モテそうだよね？」

「いや、全然」

「何でそこだけ反応するねん！」

「予想通り過ぎる反応ね。クスクス」

「笑うなあ！」

キンコーンカーンコーン！

チャイムの音が響くと頭に痛みまで駆け抜けてきた。

頭痛が余計に酷くなっている。かなり体がしんどい。

しかし、ようやく1限目が終わった。

「裕樹さん。大丈夫ですか？」

俺の様子が変わったからだろうか、里佳さんは心配そうな顔で尋ねてきた。

「ああ。大丈夫だ」

「本当ですか？」

「本当だ」

なんとか平静を保ってそう返事した。

里佳さんはそうですかと言って俺から視線を外した。

どうやら誤魔化せたようだ。

あまり他人には余計な心配はかけたくない。

極力表情に出さないようにしないといけないな。

——4 限目。

国語の先生が教科書の内容を朗読している。

俺はというと、頭痛のみならず体のだるさも酷くなってきた。

額からは脂汗でも流れているような感じだ。

これはもう保健室に行ったほうがいいのかもしいない。

コッソ

何の前触れもなしに左側頭部に軽い衝撃が襲った。

机に紙がポトリと落ちる。

前にもこんなことがあったような気がする……。

紙を払ってみる。

『大丈夫？ 顔色かなり悪いよ？』

視線を左に移す。

紫苑さんがこちらを心配そうに覗いていた。

やはりこれ以上隠し通すのは限界かもな……。

俺は手をすつと高く上げた。

先生は教科書を朗読してたにもかかわらず、それに気づく。

「ん？どうした？えつとお前は転校生の荻野だったな？」

「はい。気分が悪いので保健室に行ってもいいですか？」

そう言う先生が俺の方へ歩み寄ってくる。

「ふむ、確かに顔色が悪いな。わかった。保健室に行きなさい」

「はい」

「えーと……お！千堂、お前は副委員長だったな？保健室まで荻野に付き添ってあげてくれ」

「わかりました。では、行きましょう、裕樹さん」

「ああ」

幸いなことに最後列なので戸は近い。

少し危なっかしい足取りで教室を出た。

……。

……。

里佳さんと2人で廊下を歩く。

当然だが授業中なので誰1人としていない。

聞こえてくるのは教室から漏れてくる先生の声と俺たちの足音だけだった。

逆にその足音はこの沈黙を強調している。

「裕樹さん」

里佳さんが重い口を開いた。

彼女が何を言おうとしているのかは大体見当がついていた。

「どうして私が尋ねた時に言ってくれなかったんです？」

いつもより口調が厳しかった。

もしかして怒っているのだろうか？

「あの時はもう調子が悪かったんでしょう？何で無理をしたんですか！？」

「……余計なお世話だよ」

「余計？あなたは人に心配されることが余計だと言いますかっ！」

「何でそんなに俺のこと心配するんだよ？俺たちは別に……」

言いかけて途中で淀んでしまう。

『俺たちは別に恋人でもなんでもないだろう？』

そう言おうとしたが、言葉が最後まで出せなかった。

あの時と同じだ。楓さんに別れを告げた時とまるで同じ言葉だった。

別に言っ たって良いじゃないか……。

どうせ俺は彼女に恋なんてしない。

恋なんて、してはいけないんだ。

しかし、その言葉は喉に引っ掛かって出てこない。

ズキンッ！！

「つう！」

頭が急に痛んで思わず声を漏らしてしまう。

「裕樹さん？……裕樹さんっ！大丈夫ですかっ！？」

視界がぐにやりと粘土細工のように歪む。

目に映るものが……色がだんだん黒になってゆく。

もう自分が立っているかも分からなかった。

「しっかりしてくださいっ！」

その声を最後に、俺の意識はシャットダウンした。

すうっと目が開く。

まず視界に入っただのは見慣れない白い天井だった。

「……………は？」

自分でも至極マヌケな声が出たと思う。

しかし、今はそんなことはどうでもいいことだ。

「ここは……………どこだ？」

体をゆっくりと起こす。

見渡すと、前方と左右はカーテンで覆われている。窓から秋風が入ってきては、ひらひらと揺れていた。

風は俺の頬も掠めていき、それが少し気持ちいい。

それにしても、一体なんでこんなところで寝ていたのか。

記憶を遡ってみる。

そういえば、俺は頭が痛くなつて里佳さんと教室を出て……………。

……………教室を出てどうした？

里佳さんと途中まで歩いていたのは確かだ。

だが、そこから全く思い出せない。

なぜだか分からないが急に記憶が途切れている。

謎を謎のままにしておくのは気持ち悪いし、なんとか思い出せないのか。

目を閉じて集中してみる。

……。

すうー、すうー

気のせいか息遣いが聞こえた気がした。

すうー、すうー

……間違いなく息遣いが聞こえた。

閉じていた目をパチッと開く。音源を探してみるとすぐに見つけた。

「すうー、すうー」

犯人はすぐそばにいた。

里佳さんがベッドに顔を乗せて眠りこけている。

どうしてさっきまで気が付かなかったのだろうか。

「うーん……」

それにしてもチラッと見える首筋が色っぽいというか。

なんだかドキドキする。髪の毛もさらさらしてそうなの……。

思わず俺は里佳さんの髪に触れる。

ありふれた言葉で言うと、シルクのような髪とでも言えばいいのだろうか。

指と指の間をススーッと滞りなく流れていく。

「んん……」

里佳さんは言葉にならないような声をあげた。

俺も反射的に手をひっこめる。

「うーん。……あれ？」

ようやく目を覚ました里佳さん。

寝起きだからなのか、いつもと比べて顔がポケーっとしている。

彼女は瞬いたり、目をこすったりして意識を戻す。

同時に俺の存在にも気づいた。

「裕樹さん？……や、やだ！私、寝てしまいましたか！？」

そんなに恥ずかしかったのか、おどおどする里佳さん。

あまり見ることもないレアな光景だ。

普段とのギャップのせいもあってか、見ていて少しおもしろい。

「何を生暖かい目で見てるんですか！」

「あー。わかったわかった。とりあえず落ち着け」

「むう。大体あなたが倒れたせいなんですよ？」

「……は？倒れた？俺が？」

そう言えば教室を出た後の途中から記憶がバツサリと抜け落ちていく。

気絶していたというなら納得もいく。

だが、普段に気を失うなんてことが無いせいか、どうもしっくりとこないな。

「あ！そう言えば具合は大丈夫ですか？」

里佳さんは急に心配そうな顔つきになる。

そんな顔をされると罪悪感が出てくるからやめてほしい。

「ああ。大丈夫だ」

「……………」

「ん？どうかしたのか？」

「いえ。朝に尋ねたときと全く同じ返答だったので」

「今度は本当に大丈夫だ。むしろピンピンしている」

むん！と、胸を張って元気であることをアピールする。

「ぷっ。クスクスクス」

どうやら俺のポーズがツボにはまったらしく、彼女は吹き出して笑っていた。

こんな笑い方をするのは初めて見る。

おっとりとした笑顔が普通なのだが、今はリミッターが少し外れたような感じた。

ボタン！

突然そんな音がしたかと思えば、次いで周りのカーテンがシャーと

スライドする。

カーテンの奥から現れたのは一也と紫苑さんだった。

「あれ？里佳が笑ってる……？」

「なんやなんや？」

里佳さんが笑っているのを見て不思議がっている2人。

彼女は2人を見ると笑い止んでしまった。

もうちょつと見ていたかったな。

「あ。一也さん、紫苑さん、授業はもう終わりましたか？」

「ああ。もう放課後やで。チャイム聞こえへんだか？」

「ええ。少しだけ眠ってしまつて」

放課後？

さっぱり意味が分からなかった。

「なあ。一体いま何時なんだ？」

「もう3時だよ。今日は水曜日だから放課後はいつもよりちょっと早いけどね」

俺の質問に紫苑さんが答える。

3時ということは……俺は3時間も寝ていたのか。

いや、そんなことより。

「あれから里佳さんは授業に出てないのか？」

「そうなのよ。里佳は先生に無理言って許可してもらったんだから感謝なさい」

人差し指を文字通りビシッと俺に向ける紫苑さん。

別に自分がやったワケでもないのに、何だか妙にエラそうだった。

しかし当然俺には反論する権限もなく、しぶしぶ言うことを聞くしかなかった。

「あら。もう具合は良くなったの？」

突如発せられた声に皆が一斉に振り返る。

そこには30代ぐらいの美人の女性が立っていた。

白衣を着ていることから、この人はもしかして保健室の先生だろうか。

「そっか、君は転校生だったわね。保健室を担当している桜丘^{さくらおか} 絵^え梨^りよ」

「あ、はい。よろしくおねがいします」

「もう一度聞くけど具合はどうなの？」

「ぐっすり寝たせいかなすっかり良くなりました」

「そう、そかったわ。もう少ししたら君の親に電話しようと思っていたのよ」

「あー。どうせ親は家には居ませんから」

「まあ、とりあえず起きたのならこの紙に記入して。学年、組、席名前そして保健室を利用した理由等々」

「はい」

渡された紙にささっと記入し、すぐさま返す。

「速いわね。どれどれ……うん、大丈夫そうね。調子良いみたいだし、もう帰っていいわよ」

「ありがとうございます」

保健室を出てから校門まで一也と紫苑さんは一緒にいたが、

彼らは反対方向に家があるらしく、そこで別れた。

ということで、里佳さんと2人で帰っているわけなのだが……。

「……………」

「……………」

なんだか非常に気まずい状態になっている。

話しかけるタイミングを失ってしまい、途方に暮れていた。

どうしたものかとあれこれ考えていると、1つ言わなくてはならないことがあった。

「なあ」

「え？あ、はい」

「あのさ……その、ごめんな」

「えっと……何がですか？」

「保健室に行く前のことだ。せつかく心配してくれたのに俺、余計だなんて言つてさ……」

「……はい。私も少し言いすぎたかもしれませんが、でも、本当に心配したんですから」

「うん。悪かった」

「まあ、どっちもどっちということにしておきましょう」

「……………そうだな」

口ではそう言ったものの、全然どっちもどっちじゃなかった。

悪いのは確実に俺の方なのに。

それなのに、彼女は自分も悪いからあいこだと。

彼女の優しさが身に染みると同時に、申し訳ない気持ちになった。

「じゃあ、ここでお別れですね。私はこっちの道ですから」

「ああ。また明日」

「はい。きちんと体、休めてくださいね」

そう言って里佳さんは自分の家へと歩いて行った。

彼女はどこまでも優しい人だった。

「千堂里佳……………か。何なんだろうな、あの人は」

彼女はいつの間にか、俺の深い部分に入り込んできている。

そして越えてはならない境界線に近づいている。

もし、これ以上踏み込んで来たら……。

「何を言ってるんだ、俺は。別に好意を持たれているわけでもないのに」

自意識過剰になっている自分に嫌気がさす。

彼女はただ、体調の優れなかった俺を心配してただけだ。

それだけのことじゃないか。

……もうこれ以上考えるのは止めよう。

もやもやした気持ちのまま、俺は家に帰った。

ちょっとした願いが叶ってな

ジリリリリリリリリリリリッ!!

毎度のごとく目覚ましが叫んでいるが、今日はすっと目覚めた。

昨日の昼にたつぷりと寝たからだろう。

頭痛も嘘だったようになくなっており、珍しく爽やかな朝だった。

やっぱり睡眠って大事なんだなとしみじみ思う。

ときにさつきから非常に気になることが一つ。

頭に妙な感覚がある。なんかフワフワとてるっていうか……。

一体なんだ？

洗面所に行き、鏡に映った俺を目を凝らして見る。

すると見るも無残な寝癖がついていた。

「すっげえ寝癖だな、おい。なんだこれ？」

人の印象は髪の毛で変わるというのも納得だった。

今の俺の頭は、実験に失敗したアニメの化学者のような代物である。

流石にこれを放置したまま学校には行けない。

これでは歩くだけで、いい晒し者である。

とても濡れタオルや霧吹きでは直りそうになかったので、仕方なく髪の毛だけシャワーで湯を浴びることにした。

せっかく目覚めのよい朝も髪の毛ひとつで台無しになってしまった。

急いでスクランブルエッグを作って口に放り込む。

ふと時計を見ると8時5分だった。

そろそろ、支度しないとまずい時間だな。

急いで歯磨きやら着替えやらを済ませて家を出た。

——学校の昇降口

下駄箱で靴を脱いでいると里佳さんがやってきた。

彼女はまだ眠たいのか、目が合ったがぼんやりとしていた。

「あゝ、おはようございます……」

「ああ、おはよう。なんか見るからに眠そうなんだが」

「ふあい。ちょっと勉強してまして寝るのが遅くなりました……」

ちゃんと呂律が回っていなかった。

『ふあい』という返事からして大丈夫なんだろうか？

かく言う俺もしっかりと寝たものの、何故か欠伸は勝手にでてくるもので。

彼女の目の前で大きな欠伸をしてしまった。

「裕樹さんも眠そうじゃないですか……」

「いや、俺の目覚めは実に爽やかだったぞ。昨日しっかり寝たおかげでな」

「あ、そう言えば体のほうは大丈夫ですか？」

「もうなんともない。もう元気ハツラツって感じたな」

「そうですか。良かったです」

フワッと微笑む里佳さん。

先ほどの眠気を全く感じさせず、見ているとホッとするような顔だった。

……。

……。

上履きを履いて教室までの廊下を2人で歩く。

やはり眠たいのか、里佳さんはポケーっとしていた。

「なあ。もしかして夜眠れなかったのって昼間に保健室で寝たからか？」

そう言うとな彼女はちょっとだけ恥ずかしそうな顔になってしまった。俺の前で寝コケてしまったのを思い出したのだろうか。

しまったな……。余計なことを訊いてしまったか。

「確かに今思うとその所為でもあるかもしれないね」

「そいつはすまなかったな」

「いえ、いいですよ。今日の英語の訳を教えてくださいただければ」

「……………」

案外ちゃっかりしてるんだよな、この人も。

ぼんやりしながらも頭の回転は健在な里佳さんだった。

教室に入って自分の席にカバンを置いた。

今日の用意をせつせと机の中に押し込んでいく。

「お、裕樹。今朝も千堂と仲良う登校とは見せつけるやないか」

既に教室にいたのか、一也が冷やかしてきた。

だが俺はそれをきれいさっぱりと無視して、黙々と教科書やノートを机に入れる。

朝から無駄な体力を使うのは避けたかった。

「おーい。流されたら寂しゅうなるって分かるやろ？」

「ああ。分かっているから流したんだ」

「裕樹。お前さん案外冷たい奴やな」

「朝から変なこと言うからだ」

「まだ9月やつちゅうのに、寒さが身に染みますな」

「え？カズツちつて冷え性だったの？」

「いやな、裕樹がクール&ドライやから寒くなってきたんやわ」

「へえ、クール&ドライねえ。あたし暑がりだから来年の夏は裕樹君を横に置いとこつかな」

「おそらく余計に暑苦しくなるだけだと思う」

どこからともなく現れた紫苑さんは、ごく自然に俺たちの会話に参加していた。

何というか神出鬼没な人だ。

「あ、そうそう……」

何を思い出したのか、紫苑さんは制服のポケットに手を突っ込んでごそごそとしていた。

変なものが出てこなければいいのだが。

「ジャジャーン！ボウリングのタダ券！ちょうど4人までOKで3ゲームできるんだって」

「お、ボウリングか。ええやないか。たまにはマトモなもん持つてくるんやなー」

「ぷっちーん」

「ご丁寧にも紫苑さんは擬音語を口にした。

その効果音から想像するに、彼女の中で何かがキレたらしい。」

「カズツちの分は無しね」

「ああああ。すまんかった！俺が悪かったで許してくれ！」

「ふふーん。どうしよっかなー」

「一也が弄られていた。」

「かわいそうに。女って怒らすとロクなことないな。」

「しかしまあ、あの2人は仲が良い。」

「これで付き合っていないというのだから不思議なもんだ。」

「ホントですよ。不思議です」

「おわっ！」

「？」

「急に話し掛けられたせいで一気に心拍数が上昇した。」

「心臓がバクバクしているのが自分でもわかる。」

しかし、また思っていたことが声に出ていたのだろうか。

この癖は直さないと。

「あ、里佳もボウリング行くよね？」

里佳さんの存在に気づいた紫苑さんは挨拶もなしに誘っていた。

「ボウリングですか？」

「うん。タダ券4人分ゲットしたんだよーん」

「いいですね。私も行きます」

「おっけー！決まりね。明日は休みだから、どこかで待ち合わせして行こっか」

「駅前でええんとちゃうか？ボウリング場も近いし」

「駅前って北の方のか？」

駅があるのは知っているものの、あの辺はまだ行ったことがなかった。

しかも俺は方向音痴なのだ。

流石に迷わないとは思うものの何だか不安だ。

「そっか。裕樹君は駅に行ったことがないのかあ。なら、里佳と一

緒に来れば良いんじゃない？」

「私と裕樹さんは家が近いですからね」

「ああ。でも、それじゃ俺たちはどこで待ち合わせるんだ？」

「私が裕樹さんの家まで行きましょうか？」

「ありがたいんだけど……いいのか？」

「まあ、方向的に近いですし。あ、一応アドレスは交換しておきましようか。もしものことを考えて」

ポケットからケータイを取り出して、どうしますか？という顔をする里佳さん。

まあ、別にメアドぐらい交換してもいいかな。

今までにも、交換してきた人はそこそこいた。

しかし、転校してしまうと途端に連絡を取り合うことはなくなる。

最初のうちは続いても、時が経つにつれてメールの回数はどんどん減っていく。

それが辛かった。

でも、そんな思いはしなくてもよくなったんだ。

ならば、交換するのにためらう理由はない。

「OK。じゃあ、赤外線通信できるか？」

「はい。私の方から送りますね。準備はいいですか？」

「ああ。いつでもOKだ」

「では送ります——送信できましたか？」

ディスプレイには『千堂里佳から受信しました。登録しますか？』と表示されていた。

どうやら受信に成功したらしい。『はい』を押して登録……と。

「うん、登録できた。じゃあ、そっちに電話番号だけ入れてメールするから」

「わかりました」

さっそくアドレス帳を開いてみると、サ行には『千堂里佳』という項目が追加されていた。

俺のケータイには何故かア行と力行の名前は多いがサ行は全くなかった。

よって今、サ行は『千堂里佳』が独占していた。

選択してメール画面に入り、番号だけ入力して送信する。

すると、しばらくして里佳さんのケータイが震えだす。

「あ、来ました。では、私の方も登録しておきますね」

「裕樹君、あたしのもアドレス交換しようよ」

「あ、俺のも交換しよや」

『一之瀬紫苑』『大原一也』がアドレス帳に加わる。

件数が増えたは良いが、もともと多かったア行が2件も追加されてしまった。

——土曜日

俺はマンションの前で佇んでいる。

里佳さんと待ち合わせをしているのだが、どうにも気持ちが悪く落ち着かない。

さつきから腕時計で時間ばかり確認している。

10時57分。

もうそろそろ彼女はやってくるだろう。

「裕樹さん。すいません、待ちましたか？」

「いや、今来たところ」

一度でいいから言ってみたかったんだよな、このセリフ。

そんなささやかな願いが叶った今、妙な満足感を覚えた。

「〜」

「なんだか、ごきげんですね。何か良いことあったんですか？」

「ああ。ちょっとした願いが叶ってな」

改めて里佳さんを直視する。

当たり前だが、彼女は制服ではなく普段着。

決して派手ではないが、実に女の子らしい格好だった。

ボウリングを意識してか、スカートじゃないのは少し残念だが。

それでも十分可愛いんだから反則だよな。

「あ、あの……」

「うん？」

「えと……じつと見られると恥ずかしいといひますか……」

「あ、ご、ごめん。その……似合ってるよ」

「そ、そうですか？良かったです……」

やっぱり女の子は服装とか、結構気にするんだろうな。

まあ、お洒落しゃれに気を使うのは良いことだが、あまり行き過ぎたものは苦手だ。

どうもメイクの濃い人を見ると、ちょっとうんざりしてくる。

その点、里佳さんは実に俺好みだった。

「では、そろそろ行きますか」

「ああ。案内よろしく」

……

……

…

てくてく歩くこと約15分。

俺たちは駅周辺に到着した。

ここら一帯ではなかなか立派な駅であり、いろんな店が並んでいて活気がある。

カップルもちらほらいた。

俺と里佳さんも、こうして歩いているとカップルに見えるのだろうか。

彼女は一体どんな気持ちで俺の隣を歩いているのだろうか？

「あ、きたきたー。おーい！こっちこっちー」

ぼんやり歩いていたら、いつの間にか目的地に着いたらしい。

といつてもここが最終目的地ではないが。

それにしても、さっきから手を振りながらピョンピョン跳ねる紫苑さん。

周りの視線が気になるからやめてほしい。

ただでさえ美人だというのに、紫苑さんの私服もなかなか可愛い。

今時のスタイルとでも言うべきか。

まあ、こっちもスカートは穿いていないのだが。

それでも歩いているだけでモデルのスカウトが寄ってきてそんな容姿なのだ。

そんなんだから通りすがりの人の視線も集めている。

「無事にたどり着けたんやな。もう道は覚えたんか？」

「ああ、覚えた。……………たぶん」

「最後の言葉がちょっと気になるけど、そんなことよりボウリング場にレッツゴー」

ここからが本領発揮ですよ

「うーん。どのボウルにしようかな。……よし、一番軽いのにしよう」と

「情けないで裕樹。男ならもっと重いやつで行こうや」

「いや、球技系は苦手なんだな。扱い安そうないつにする」

そう言っただのは番号の最も小さいボウルだった。

流石にキッズ用にするのは情けなさすぎるのでやめておいた。

だが、大人用では最も軽いこのボウルでも俺には十分重い。

「球技が苦手ってか……。ボウリングにそんなん関係ないんとちゃうか？」

「いや、お前は俺の球技の下手さを甘く見ている」

「そこまで言うんならやめとけば良かったやん」

「せっかく誘ってくれた紫苑さんに申し訳ないだろ？」

先にボウル選び終わった女性陣を横目で見た。

里佳さんと紫苑さんは見るからに楽しそうな顔をしている。

それだけでも、ここに来て良かったと思う。

「ま、それもそうやな。じゃあ、そろそろ行くとしましょか」

「ああ」

……

……

……

…

「さて、それじゃあ行ってみようか。まずはカズツちね」

「ふっふっふ。俺の実力、見せたるやないか」

自信満々にそう言った一也。

ボールを持って構えるその姿はいつもと気迫が違っている。

一体あいつはどんな投球をするのか。

ゆっくりボールを引きながら歩いてゆき……投げる。

ボールは右側寄りを転がっていく。

このまま行けばピンは数本しか倒れないだろう。

しかし、まるで意志を持っているかのように、ボールは真ん中に向かってカーブした。

ガコオーン！！！！

ピンがはじけ飛ぶ。

一也のボウルの威力はなかなかだった。

が、惜しくも1本だけが一也を嘲笑うかのようにそびえ立っていた。

「ぬう、1本残ってまったか……」

そんな呟きが聞こえてきた。

残念ながらストライクは取れず終い。

「まあ、あれならスピアだろうな」

「や、あそこまでは良いんだけどねー。問題はその後よ」

「ん？どういうことだ？」

「見ていれば分かりますよ」

――2投目

一也は左端に1本だけ残ったピンに向けて投げた。

が、今度はボウルが避けたかのようにピンの横を通過する。

「ああああ。なんでやねん!？」

関西人の『なんでやねん』を今、初めて聞いた。

やっぱり生は違うなあと少し感心してしまう。

「よし、次はあたしだね」

ささっとボウルを準備して投げる態勢に入る。

華奢な外見とは裏腹に軽やかで、かつ鮮やかにボウルを投げていた。

ガコオーン!!!

真ん中ちょい左をぶち抜いてピンは全て倒れた。

……………全て倒れた？

『STRIKE!!!』

テレビの画面にはそう表示されている。

俺は口がポカンと開いて言葉が出なかった。

ストライクだって？

「やったあ！初っ端からストライクって幸先いいねー」

「わー。流石ですね」

「ぬぬぬぬぬ」

もともと運動神経が良いのだろうか。

里佳さんも流石と言っぐらいだしな。

それにしても一也は、まるで犬が威嚇しているように唸っている。

「何を唸ってるんだ暑苦しい。紫苑さんって最初から運動神経いいんだろ？」

「ああ、そうや。スポーツで勝てるもんなんてあらへん。勉強でもあいつにはかなわへん。何でなんやろか？」

「へえ。何でもできるんだな。どの学校でもいるもんだな、完璧な奴って」

「そんなことあらへんで。あれでもあいつは料理はへったくそでな……」

「あらカズツち。なあにを話してるのかなー？」

「え、いや……せ、千堂！次はお前の番やで！はよう投げよか？」

「ふふつ。分かりました」

急に話を振られながらも冷静に対処する里佳さん。

その対応は大人だった。

「では、いきます」

投げたボウルはストレートに転がってピンに向かう。

それにしても、思うにボウルの転がり方って性格がはっきり表れるもんだな。

一也の軌道なんか途中で曲がっていくもんな。

その点、里佳さんのボウルは正直で真つすぐな軌道だった。

ガコオーン！！！！

倒れたピンの数は7本。

こう言っではなんだが、なんとも里佳さんらしい本数だった。

「うーん。頑張ってスペアを狙います」

そう言っで里佳さんは再度投げる。

ボウルは鮮やかなストレートで転がっていく。

倒し損じた3本のピンは見事に1ヶ所にかたまっている。

ボウルはその場所に吸い込まれていった。

ガコオーン!!!

その音をたてて全てのピンが倒れていた。

それはつまり……

「やりましたあ。スペアです!」

「おおー。やったね里佳!」

「ぬぬぬぬぬ」

またもや一也は唸っていた。

そんなに男としてのプライドが彼を許さないのだろうか？

俺はというと球技における運動神経はとうの昔に諦めてしまっている。

よって悔しさは全くないのだ。

「おまたせしました。次は裕樹さんですよ」

「あ、ああ」

……いかん。なんだかとても緊張してきた。

なんだかんだで皆のスコアはかなり高い。

さて、どうしたものか。

取りあえず、緊張ほぐしも兼ねてボウルを雑巾で拭いてみる。

「あの……。まだ1投もしていないのに拭く意味があるんでしょうか？」

「あ、それもそうか……」

何とも間抜けなことをしてしまった。

仕方ないので拭くのを止めてボウルを持って前に立つ。

平常心だ……。平常心……。

この状況を説明するなら背水の陣といったところか。

いや、四面楚歌のほうがいいかもしれない。

そうだよ。皆して初めからハイスコア出しやがって！

もうどうにでもなれ！

「いつけえ……！」

ボウルを投げる。

しかし、むなしくも半分も行かないところで右側のガーターに落ちてしまった。

「……………」

「「「あーあ」「」」

後ろからそんな声が聞こえてくる。

ふん、どうせこうなると少しは思っていたさ。

まあ、実は予想してたことではあるが実際にやってみると結構恥ずかしい。

「大丈夫大丈夫。まだ始まったばかりだよ」

「次でストライク取れば問題ないで」

「ここからが本領発揮ですよ」

三者三様の慰め言が逆にグサツと胸に突き刺さる。

しかも里佳さん。その言葉は違うよ。

もうとつくに本領発揮してるさ。

なんていうか、今この状態がまさに俺の本領なんだよね……。

などと嘆いてはおれず、再度ボウルを投げようとする。

さっきは右側に落ちたんだ。

それなら今度はちょっと左の方に………いつけえ！

しかし、その瞬間………

「ぐはっ！」

投げようとしたボウルが思いっきり右足に当たった。

かなり痛い。叫びそうになったが声を押し殺す。

それよりも俺のボウルは一体どこいったんだ？

「裕樹さん！右です！右！」

後ろからの声に俺は右を向いた。

すると俺のボウルは他人のレーンのガーターに転がり入っていった。

「な、なんだあ！？」

「どうかしたのかー、相田あ？」

隣の人は相田という名前らしい。

ごめんよ、相田。

俺だってそんなことするつもりは無かったんだ、許してくれ。

一応頭だけは下げておいて皆のところに戻る。

全員が腹を抱えて笑っていた。

「クックク。あっはははははは！お、お前最高やわ裕樹。なあははははは！」

「あ、あたしも笑いすぎて……。な、涙がでてきたよ、くくくつ……」

「ぷつ、クスクスクス……。す、すみませえん。笑ってはダメなんですけど……クスクス」

ああ、わかっていたさ！こうなることぐらい。

そもそもお前らが悪いんだよ。

最初っからあんなハイスコア取りやがって。

そんな中で投げるプレッシャーって重たいんやぞ！

もはや責任転嫁というべき言い訳を心の中でしておく。

そうでもしないと俺の心は耐えられそうになかった。

かくして早くも1ゲームが終わっていった。

成績はこんな感じである。

1位	紫苑さん	152点
2位	里佳さん	135点
3位	一也	99点
ビリ	俺	52点

うん。なんていうかさ。

人生なんてボーリングが下手でも生きていけると思うんだよね。

うん。別に悔しくもなにもないですよ。

ええホントに。

「しかし2人のスコア足してもあたしに勝てないって情けないねえ

「」

「くっ……」

「ま、まあまあ。あの、2人足して私のスコアには勝ったので……」

いや里佳さん、全くフォローになってないよ。

それにしても女性陣は半端なく強かった。

100越えでも十分すごいと思うのに、何なんだよ152って？何なの135って？

俺も一応それなりに腕力とかはあると思うんだけどな……。

「じゃあ、負けた男性陣は飲み物買ってきてね」

「はあ？」

「2人揃って『はあ？』じゃないの！今日はあたしのおかげで遊べてるんだよー？」

もはや小悪魔を通り越して悪魔だった。

とはいうものの反論できず、結局自販機に買いに行く。

「まったくあいつは情けのない奴や」

俺たちは情けない奴だけだな。

「まあ、仕方ないだろ。多分そうでなくても俺たちが買いに行く流れになるさ」

俺はアップル、里佳さんはオレンジ、紫苑さんはスポーツ飲料、一也はお茶だった。

それぞれ2つずつ手分けして持ち、女たちのところへ戻っていく。

と、男の2人組が何やら里佳さんたちと話している。

「ん？何だあれ？」

「はあ、またか。やっぱこうなるんやな」

「こうなるって？」

「ナンパやナンパ。あの2人ってなんやかんやで美人やる？1人だけでもナンパされるらしいけど、セツトである時やと街歩してるだけで絶対に声かけられるんや。今まで俺が対処してきたんやけどな」

「お前も大変だったんだな」

「そやけど今回は俺だけやないで楽といや楽なんやろか。で、喧嘩は弱くはないんやったよな？」

「まあ、球技じゃなければ大丈夫だ」

「喧嘩にならんだらええんやけど、もしもの時は一緒に頼むで」

「りょーかい」

そう言つて俺らは2人のところに駆けつける。

騒動にならないといいんだけどな。

仕方ないと割り切り、腹を括ってナンパ達の背後に立つ。

「「おい、お前ら」」

「ああん？なんだよ？」

「「俺らの女に何か用か？（－|－メ）」」

……

……

……

…

「いやー、やっぱり男は頼りになるねー」

「そうですね。ありがとございました。2人ともカッコよかったですよ」

「まあ、別にこれくらい……」

とはいうものの女からカッコイイと言われるのはやっぱり嬉しい。

思わず頬が緩んでしまふ。

いつもより少しルンルン気分だった。

「そんな大したことしてへんで。しかしな、紫苑。さっきと言ってることが全然違うんやけどな」

「まあまあカズツち。感謝してるんだからさ」

「そうですよ。それよりも2ゲーム目始めませんか？」

「そうだな。もう2回残ってるしな」

「むう……。ええやろ。次こそは勝つたるでな」

かくして2ゲーム目が始まった。

当然、俺には悲愴なスコアが残されてしまったが。

まあ、ある意味エンターテイナーになれたから良しとするか。

うん。全然悔しくないですよ。

ええホントに。

どっちでしょうか

「いやー、それにしても楽しかったねー」

「究極のお笑い芸人がおったでな」

「下手な芸人よりずっと笑えましたよね」

俺たちはボウリングをやり終えて一息ついていた。

残ったジュースを飲みながら雑談している。

ゲームの結果は言うまでもないだろう。

さっきから聞いていれば散々な言われようである。

ていうか里佳さん、あなたもそっち側の人なのか？

味方0人の孤立無援とはこのことを言うんだな……。

「お、むこうにゲーセンあるやん。後で寄ってかへんか？」

「いいねー。あたしレーシングゲームは得意なんだよね」

「ゲーセンですか。私もいいですよ」

……ゲーセンか。

そっぴや、最近は全く行ってなかったな。

楓さんとの数少ない思い出の場所の1つである。

エアホッケーとかして遊んだっけ。

「裕樹さん？」

「え？」

「どうしたんですか？ボーっとして」

「ああ。ちょっと久々に運動したから疲れちゃってな」

「そうですか。それで裕樹さんもゲーセンに行きますよね？」

「おう、行く行く」

ってしまった！とつさに行くって言っちゃったな。

まあ、別にいいか。

そこまで気にすることもないだろう。

残ってたジュースを飲みほして俺たちはゲーセンに足を運んだ。

というワケでゲーセンにいたんだが、何をしようか。

一也と紫苑さんはレーシングゲームで勝負をしに行った。

よって今は里佳さんと行動している。

ボウリングと協力し合って繁盛しているらしく、置いてあるゲームも沢山ある。

しかし、逆にここまで多いと何をすればいいのか迷ってしまう。

「あーあれなんてどうですか？」

「あれって？」

「あれですよ。名前は確かエアホッケーだったと思うんですが…

…」

マジかよ。よりもよってエアホッケーを選ぶのか。

しかし、せっかくの提案を無下にするのも気が引けたので承諾した。

「勝負に勝った方がお金を払うのでどうでしょうか？」

「そつだな。あいつらも勝負してるっばいし、俺たちもやるか」

「はい。では取りあえず私がお金を入れますので」

そういつて里佳さんは100円玉を投入した。

同時にホッケーの台がライトアップされる。

「準備はいいか？どうやら俺側のほうに円板があるらしい」

「はい。いつでもいいですよ」

「じゃあ、行くぞ。それっ！」

直接ゴールを狙わず壁に当てて入れに行く。

が、外見とは裏腹に里佳さんも運動神経はなにかと悪くはない。

俺のシュートをブロックして反撃を仕掛けてくる。

どうやら実力はそこそこ近いらしい。

これは熱くなりそうだ。

……

……

…

熱戦の末、結局負けたのは俺の方だった。

まあ、別にそこまではいいんだ。問題は……

「クスクスクスクス」

「……………」

「す、すみません。でも、おかしくて……」

偉大なる学者、アイザック・ニュートンよ。

既に死んでいるところ悪いが、俺に教えてくれ。

リンゴが木から落下する理由はあなたの説明でよく分かった。

ならどうして水平に打ったはずの円板が宙を舞い、毎度毎度俺の顔を直撃するのか。

「クスクスクス」

まだ笑ってるし……。

しかし、何度も言うが、何故こうまでも円板が俺のおでこに直撃するのだろうか。

俺に対する恨みでも持っているのか、この円板は。

「——さん。裕樹さん?」

「ほあ?」

なんか随分とマヌケな声をあげてしまった。

最近やけに恥ずかしい思いばかりするのは俺の気のせいだろうか？

「大丈夫ですか？またボーっとしてましたけど」

「あ、ああ」

「裕樹さんってたまにボーっとしますよね」

「そうか？」

「はい。……もしかして妄想癖とかお持ちですか？」

「そんなワケあるかい！まあ、たまに昔のこととか思い出したりするんだよ」

「昔のことですか。例えばどんなことですか？」

「え？」

「裕樹さんの昔話。少し聞いてみたいです」

「俺の昔話ねえ。聞いててもつまらないだけだと思っぞ？」

「じゃあ質問です。こっちに転校してくるまでどこに住んでたんですか？」

ちよっとちよっと。きちんと人の話聞いてましたか？

里佳さんは俺の言葉をきっぱりと無視した。

この人って時々強引な時があるよな。

それにしても、いきなり答えづらい質問をふっかけてきた。

ここは正直に答えるべきなんだろうか？

彼女にはあまり嘘はつきたくない、ついにはいけないような気がした。

「うん。特に決まった家はなかったよ」

「え？あの……もしかしてホームレスだったんですか？」

ここで俺は盛大にずっこければいいのだろうか。

いくらなんでもそれは無いわ！

「違う違う。俺ん家って転勤族なんだよ。マンションとかアパートを転々と引っ越してきたんだ。断じてホームレスではない」

「す、すみません……」

「いや、別にいい。たぶん俺の説明が悪かったんだ」

「あの……1つ聞いてもいいですか？」

「うん。何？」

「裕樹さんはまたすぐに引越してしまうんでしょうか？」

里佳さんは少し上目づかいでこちらを見ている。

何でよりにもよって楓さんと同じ質問を……。

「いや、今回は俺一人だけでここに来たんだ。だから今は一人暮らしなんだよ」

「だから家に親がいないって言ってたんですね……」

「え？今、何か言った？」

最後に里佳さんが何か言った。

しかし、スロットのメダルが出てくる音にかき消されて聞き取れなかった。

「いえ、なんでもありません」

「そうか？ならいいけど……」

「あ！あそこにクレーンキャッチャーがあります」

はぐらかされたような気がしなくもないが、深く考えないことにした。

里佳さんはクレーンキャッチャーのウィンドウの中を覗き込んでいた。

「何か目ぼしいものでもあるのか？」

「はい。あのクマさんなんか可愛いなあて……」

「じゃあ、俺が取ってやろう。1回につき100円か」

「え、そんな。別にいいですよ」

「ふつ、俺に任せておけ。こういうのは得意なんだよ。前に来た時もうさぎのぬいぐるみを一発で……」

そこまで言って先の言葉が紡げない。

ふと、昔の記憶がまた少し蘇った。

前に楓さんと来たときも、クレーンキャッチャーをやったっけ。

……

……

…

「あ！あのうさぎ可愛いな」

「それは暗に取ってくれと要求しているのか？」

「普通この場面なら、俺が取ってやろうか？ぐらい言ってもいいんじゃないユーキ君？」

しぶしぶ財布から金を取り出して機械の中へと投入する。

あのうさぎに100円も費やされてしまった。

こうなったら何が何でも一発で仕留めてやる。

心なしかウィンドウのなかのうさぎが俺を恐れているように見える。

今の俺の心はライオンそのものだ。そんな顔してようが絶対にお前をゲットしてやるぜ。

もしま、この心境が例のライオンハートというやつだろうか？

「なんか気合が入ってるね」

「ああ。今の俺は百獣の王だからな」

「よく意味が分からないけど、頑張ってるね」

……

……

…

と、まあこんな感じだった。

意気込みあつてか一発でうさぎのぬいぐるみを捕まえることができた。

そついや、俺が取ったからって『ユウちゃん』なんて名前付けてたな。

「裕樹さん？」

「ん？ああ、わかった。ちゃんと俺が取ってあげるよ楓さん」

「え？……楓さん？」

「あ……………」

やってしまった。

よりによって里佳さんに面と向かって楓さんと言ってしまっなんて。

彼女は訝しげな顔をしてこちらを見ている。

まずい、急に心拍数が上がってきたぞ。

とにかく誤解を解かなくては。何か言わないと……。

「「あの……………」」

声がハモってしまった。

なんか前にもこんなことがあったような気がする。

「あ、えっと…………何？」

「あの……楓さんって誰ですか？」

「ああ、なんていうかな。昔の友達だよ。前に一緒にゲーセンにきたことがあって、クレーンキャッチャーでぬいぐるみを取ってあげたんだ」

「……」

「えつとな。それでそのこと思い出したら間違えちゃったんだ。その……ごめん」

頭を下げてそう言ったが、里佳さんは何も言っていない。

やはり怒っているのだろうか。

「……ぬいぐるみ」

「え？」

「私にもクマのぬいぐるみを取ってください。そうしたら許してあげます」

「あ……。うん、取ってあげるよ。任しといて！」

こうして俺はクレーンキャッチャーでクマのぬいぐるみを取った。

もちろん言っまでもなく一発で。

はい、と渡すと眩しいくらいの笑顔でありがとうございますと言わ

れた。

その笑顔だけでも取った甲斐があつたかな。

その後、里佳さんの持つぬいぐるみを見た一也と紫苑さんにヒューヒューと冷やかされたが。

ゲーセンから出た時はもう夕方だった。

見上げた空は茜色に染まっている。

途中まで4人で帰っていたが、一也と紫苑さんは別方向なので今は里佳さんと2人きり。

俺たちはのんびりと並んで歩いていた。

特に会話があるワケではないが、雰囲気は悪くなかった。

ふと、彼女を見るとぬいぐるみを大事そうに抱えていた。

「それ、そんなに気に入ったのか？」

「それって？」

「ぬいぐるみだよ。なんか大事そうに抱えているからな」

「はい。ぬいぐるみをプレゼントされるのって10年ぐらい前の誕生日にお父さんに貰って以来ですのうで」

「そっか。まあ、大切にやってくれ」

「はい」

そっぴや楓さんはぬいぐるみに名前付けてたな。

あのクマはどうなんだろう？最初から何か名前があったりするのだろうか。

「そいつって名前とかあるのか？」

「名前ですか？そっぴえば見たところ何も書いてないですね」

「なんかのキャラクターってワケでもないんだな」

「じゃあ、私がつけましょう。そうですね……裕樹さんに貰ったのでユウキにしましょう」

楓さんといい、あなたも俺の名前ですか。

まあ別に悪い気はしないんだけど、なんだかなあ。

改めてクマのぬいぐるみを見る。

確かに愛らしい顔をしているが、こいつの名前はユウキ。

俺と同じ名前のユウキ。

「なんかそれ嫌だな」

「別にいいじゃないですか。ねえ、ユウキさん？」

「なあ。今人形が俺、どっちに話しかけたんだよ？」

「ふふ。さあ？どっちでしょうか」

里佳さんは少し意地悪に微笑んだ。

何でもそこまで言っんですか……（前書き）

ようやくこの辺から前作と話が変わってくる、と。

何でそこまで言っんですか……

シリシリシリシリシリリッ！！

いつもの様に目覚まし時計は朝から気合が入っている。

まだ強烈に眠いけど、今日は学校だから起きないとな。

もぞもぞと時計に手を伸ばそうとした刹那、二の腕あたりに違和感を感じた。

「マジか。まだ筋肉痛治ってないのかよ……」

ボウリングに行ったのは土曜日。

そして今日の日付は月曜日。

1日おいても尚、筋肉痛は健在だった。

「風呂に入る前に腕立て伏せでもして鍛えようかね」

そんな考えが浮かんだが、すぐに却下した。

以前にも、やろうと決意して腹筋を始めたものの続いたのは2日だけ。

三日坊主すら達成できなかった俺は持続力が無いのだろう。

我ながらなんと情けない体である。

今日も今日とて学校までの道のりを歩く。

体調が回復している今、心なしか身体が軽く感じる。

幸いにして筋肉痛は腕だけなので歩くのに支障はない。

すぐさま学校に着いてしまった。

靴を脱ぎ、まだ新しくて馴染まない上履きに履き替える。

「裕樹君おはよー」

「いきなり後ろから声を掛けなくてくれよ。心臓が飛び出そうだったぞ」

「いきなりじゃない声の掛け方ってあるの？」

そう尋ねられて何の反論も思い浮かばなかった。

「……そんなことより何か用なのか？」

「あ、誤魔化した」

「はあ……。一也の苦勞が解かる気がする」

「どうしてここでカズっちの名前が出てくるのか、非常に気になるわね」

「さあ？なんでだろうな？」

「またそうやって誤魔化する……。里佳の苦勞が解かる気がするわ」

「何でそこで里佳さんの名前が出てくるんだろうな？」

「さあ？なんででしょうね？」

今日の授業に数学は無い。そう考えただけで嫌な気分は吹き飛ぶ。
だが、一つ気がかりなことがある。

ちらりと里佳さんの席を見る。HR開始1分前だというのに、そこ

にいるはずの人がいない。

妙だな。いつもならとっくに来ている時間なのに……。

そしてとうとう里佳さんが来ないまま葛城先生が来てしまった。

風邪でも引いたのかと紫苑さんに聞いてみたが、どうやら彼女も知らないらしい。

一体どうしたんだろうか？

「さあて、出席を確認するか。……ん？荻野の横に空席があるな」

先生は面倒だからか、いつも点呼は取っていない。

だが皆が出席しているかどうかきちんと見ているらしい。

「千堂が休みか……。おい、荻野。何か知らないか？」

「いえ、わかりません」

その時、誰かのケータイの着信が教室に鳴り響いた。

音源は……左のほうだ。

顔を左に向けると紫苑さんがなにやらもぞもぞしている。

すると紫苑さんは全く罪悪感を感じてなさそうに堂々とケータイを開き、画面を見ていた。

「一之瀬のケータイか。今はHRなんだからケータイは……………」

「あ、里佳…………じゃなくて、千堂さんからです。今日は風邪で休むそうです」

「千堂から？なるほど風邪か……。わかった。皆も季節の変わり目だから風邪をひかないようにな」

ありきたりな言葉で生徒に注意を促して、名簿にカリカリと書き込む先生。

やっぱり風邪だったか。

「よしこれでHRは終わりだ。っていうか一之瀬！返信しているのか知らないがHRの後でしなさい」

「あ、ごめんなさい」

紫苑さんはケータイを閉じて謝罪の返事をする。

まあ、どうせ形だけのものなんだろうが。

「まあ、とにかく終わるか。大原」

「起立。礼」

それから里佳さんのいない授業を受けた。

なんだかいつもより味気ない気がしたのは思い過ごしなのだろうか。

――昼休み

紫苑さんと一也と一緒に学食に来ていた。

「でさー、里佳のことなんだけど。裕樹君、お見舞いに行つてあげてくれない？」

「ああ、もちろんいいぞ………つて1人でか!？」

「俺たちもホンマは行きたいんやけどな。今日は部活の大事なミーティングがあるねん」

「……は？部活？お前ら部活やってるのか？」

そんなの初耳なんだが。

てつきり俺と同じく帰宅部だとばかり思っていたのに。

まさに青天の霹靂^{へきれき}だった。

「あれー？言つてなかった？あたしと一也は料理部なんだけどねー。

今度、大会があるからミーティングがあるの」

「ちなみに里佳さんも何か部活を？」

「あいつはお前と同じ帰宅部や。ちゅうかね、なんで紫苑が料理へたやのに料理部に入ったんか………あだあ!？」

すかさず紫苑さんは一也の頭をひっぱたく。

上下関係がはつきりしているなあ。

「料理が上手くなるために入ったに決まってるでしょ。で、話を戻すけどね？」

「ああ」

「あたし達は行けないから、悪いんだけど1人で行ってくれないかな？」

「そんなこと言われても場所が分からないんだが」

「そのことなんだけど……あたしが裕樹君のマンションからの地図を描くね」

「地図を描く？そんなことできるのか？」

確か紫苑さんの家の方角は全く違う。

だと言うのに、俺のマンション周辺の地図を描けるのだろうか？

「ふっふーん。あたしを甘く見ないでほしいわね」

ポケットから紙とシャーペンを取り出して描き始めた。

何でそんなもん常備しているのか非常に気になったが、みるみるうちに地図が完成していった。

「すごいな。人間か？」

「失礼ねー。ちゃんと海馬に記憶してるのよ」

「料理の腕前は上がらんけどな………いぎっ!？」

一也は再び奇声を上げて悶えていた。

なんというか、随分とバイオレンスな関係なんだな。

頑張れよ、一也。

「はい。じゃあ頼んだよー」

「ああ」

「あ！忘れるところだった！」

何かを思い出したらしく、彼女は制服の懷を探っていた。

そして懷から出てきたのは一冊の本だった。

「この本なんだけど里佳に貸すつもりだったんだよね」

「占いの本か。女子が好きそうな代物だな」

「裕樹君だって、目え覚ませテレビの今日の占いカウントダウン何とかってやつ見るでしょ？」

「確かに見てるけど、あれ俺の星座ってよく11位になるんだよね……」

「あー、最下位は救済措置があるけど11位には無いもんね」

「そうだろ！いつそ最下位になったほうが良いんじゃないかと思うんだ」

「って、いつの間にか話がものすごく脱線してるし。」

「恐るべし、目え覚ませテレビ。」

「まあ、このトークはまた今度。とりあえず渡しとけばいいんだな？」

「うん。じゃあ、よろしくね」

というワケで、紫苑さんの地図を頼りに無事に里佳さんの家にたどり着いた。

表札にはちゃんと『千堂』と書かれている。

わりと珍しい名前だから間違いないだろう。

ここで伊藤とか加藤とかなら不安になるかもしれないが。

ただ、問題はインターホンを押そうとすると指が震えることなんだよな。

手をかざすだけでプルプルと震えて押せない。

せつかくここまで来たんだ。頑張れ、俺。

「ワンワンワンワンッ！」

「つつ！ー！！」

俺は勢いよく振り向いた。

散歩をしていた犬が俺に向かって吠えていた。

だが、すぐに飼い主にリードを引っ張られて去って行った。

まったく驚かしやがって……。心臓に過度の負担をかけて殺す気か！

まあ、なにはともあれ元凶は去って行ったから安心だ。

そつと肩の力を抜く。

ピンポン♪

………は？

突然、そんな音が鳴った。

自分の指を凝視すると、千堂家のインターホンを押してしまっていた。

冷や汗が背中を流れる。

あの犬め！次に会ったらその両足を掴んでジャイアントスイングしてやる。

『はい……。どなたでしょうか？』

「あ、えつと。荻野裕樹と申しますが」

『……………』

スピーカーから何の返事もない。嫌な汗が流れる。

「あの、聞こえてますか？荻野裕樹と申しますが……………」

『…………ゆ、裕樹さんですかっ!?!』

応答したのは里佳さん本人だった。

どうやらインターホンの向こうではかなり動揺しているようだ。

まあ、無理もないか。

『今、行きますから……………待っててください』

「ああ」

その言葉を最後に、インターホンがプツンと切れた。

30秒ぐらいたってから玄関のドアがゆっくり開く。

中から出てきた里佳さんはパジャマ姿だった。

「こんにちは。具合は大丈夫か?」

「はい…………。でも、裕樹さん、どうして私の家が?」

「紫苑さんに地図を描いてもらった」

「そうでしたか。えと、じゃあ、とりあえず入ってください」

「うん。お邪魔します」

里佳さんの家、名付けて『里佳ちゃんハウス』に入る。

壁際に飾ってある花から甘い香りがした。

流石は『里佳ちゃんハウス』だ。ささやかな心遣いも忘れない。

そんなことを考えながら、彼女に渡されたスリッパに履き替える。

スリッパには可愛いクマさんの絵がプリントしてあったが、気にしないでおく。

「こつちです」

……。

……。

……。

『里佳ちゃんハウス』の一室でもある彼女の部屋。

なんと女の子らしい部屋だった。

ファンシーな小物とかが置いてあったり、ぬいぐるみがあったり。

よく見ると俺がプレゼントしたクマのぬいぐるみだった。

その隣にはちょっと古いが、同じくクマのぬいぐるみがある。

前にお父さんにプレゼントされたって言ってたな。

「ここに座っててください。お茶を入れますから」

「病人が無茶すんな。途中で店に寄って買ったミカンがあるから食ってなさい」

大サービスにミカンの皮を剥いてやる。

「はい。どうぞ」

「なんだかお父さんみたいですな」

などと言いながら里佳さんはモグモグと食べていた。

その仕草は小動物、例えばハムスターなんかを思い出させるというか。

見た感じどうやら大した風邪ではないようで何より。

「そついえば紫苑さんと一也さんは？」

「部活だって。なんでも大事なミーティングがあつて来られないとか」

「料理部でしたね。いいですよねえ料理部って」

「里佳さんは入らないのか？」

「私は家の手伝いがありますので……こほんっ」

里佳さんは急に咳をした。

まだ完全に治りきつてないようだ。

「寝てた方がいいんじゃないか？」

「せっかく来ていただいたのに、そんなことできません」

「俺のことは気にしなくていい。体を休めろ」

「何でそこまで言っんですか……」

「俺は里佳さんのことを心配して言ってるんだ！」

「……ふふふっ」

何故かいきなり笑い出す里佳さん。

俺、何か変なこと言った？

「裕樹さん、あなたが倒れて保健室に運ばれたこと覚えていますか？」

「……ああ」

「そのとき、あなたはこう言ったんです。『余計なお世話だよ』って。私が心配してたのに」

「……………」

「でも、あなたは今、私の心配をしてくれました」

何も言い返せなかった。

なぜなら、彼女の言うとおりだったから。

「私、とても嬉しかったです」

そのとき彼女が浮かべた笑顔に、不覚にも胸が高鳴ってしまった。

俺はカバンから例のものを取り出す。

「これ、紫苑さんから里佳さんに渡すようにって預かってたんだ」

半ば強引に里佳さんの手に突き出した。

「あ、ありがとうございます」

そう言つて里佳さんは少し戸惑いながらも受け取った。

「じゃあ、俺は帰るから」

「え？」

呆気にとられている里佳さんを残して、俺は彼女の部屋から、そして彼女の家から立ち去った。

その帰り道、俺はひたすら走っていた。

里佳さんの笑顔で高鳴ってしまった胸。楓さんのときと全く同じだ。

俺は……俺は里佳さんに恋してしるのか？

そんなことを思った瞬間、居ても立っても居られなくなり、彼女の家を立ち去った。

だから俺は走っている。

走ることによって心拍数が否応無しに上がる。

そうすることで、胸に響く甘い鼓動を無理やり誤魔化そうとしていた。

この気持ちを闇へ葬るために。

……噓つき

——ある日の放課後。

昇降口の屋根の下から空を眺めていた。

午前中はあんなにも晴れていたというのに、大粒の雨が降っていた。確かに夕立という現象が起こりやすい季節ではある。

こんなこともあるつかと、折りたたみ傘をカバンに入れておいた自分自身に感謝。

早速取り出して差そうとした矢先、困った顔で空を眺めている女の子に気づいた。

彼女の名前は二宮楓さん。俺の席の隣の人だ。

その様子から傘を持っていないのだろう。

「あの……楓さん」

「ん？おー、ユーキ君！」

「もしかして、傘持っていないのか？」

「そうなんだよね。午前中あんなに晴れてたから」

二人して空を見上げて苦笑いした。

「折りたたみ傘で良ければ貸そうか？」

「え？でもそれだとユーキ君の分がなくなるでしょ？」

「俺、折りたたみ傘2本持つてるんだ」

「はい？何で2本も？」

「前にも友達に貸したことがあったんだけど、それを今日返されて2本になったんだ」

「あ、そうなんだ。じゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

「はい、どうぞ」

「ありがたや」。お礼に明日弁当作ってあげるね」

そう言い残した後、彼女はそれを差して走って帰った。

急いでるみたいだし、きっと何か用事でもあったのだろう。

俺は彼女が見えなくなるまで見送った。

弁当作ってくれるのか。思わぬラッキーだな。

「さて、後はこの雨止んでくれたらなあ……」

我ながら嘘が上手くなったかと、一人しみじみ感心していた。

ジリリリリリリリリリリッ！！

懐かしい夢から現実に引き戻したのは不愉快な金属音だった。

どうやら余韻に浸らしてくれる気はないらしい。

しょうがないので布団の中から手を伸ばし、けたたましく鳴り響く音源を黙らせようと試みた。

だが、勢い余った手が目覚まし時計にブチ当たってしまった。

ガシャンと倒れる音が布団の外で響いた。

気を取り直してもう一度手を伸ばす。

けれども、そこにあるはずの感触を得られなかった。

どうやらぶつかった衝撃で布団から離れてしまったらしい。

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリッ！！

どんだん奇立ちは募ってゆく。

早く安息を取り戻したい一心で、さらに手を伸ばす。

しかし指先はフローリングの床を撫でるばかり。

思い切って限界まで手を伸ばしてみる。

ビキッ！

「痛い痛い痛い痛い！！」

手をつってしまった。

HR開始まであと2分足らずだというのに、俺はのんびりと廊下

を歩いている。

今日はぎりぎりで間に合うように家を出た。

言うまでも無く、里佳さんに会いたくないからだ。

今の状態ではまともに話もできないだろう。

そして昨日のことがあるから、彼女は絶対に話しかけてくる。

今日も風邪で休んでくれれば良いのだが。

「俺って最低だな。人の不健康を願うなんて」

ため息を一つ。

窓の外を見ると、まるで俺の心を表しているような空模様だった。

国語の小説じゃあるまいし。

いつそ晴れてくれたら少しは気分が楽になるのに。

考え事をしている内にいつの間にか教室に着いていた。

そっと教室に入り、誰にも目を合わせないように座る。

……はずだった。

「おはようございます」

なんというか、一番会いたくなかった人が自分の席の隣だということとを失念していた。

至極間抜けな俺だった。

「昨日はお見舞いありがとうございました」

ぺこっと頭を下げる里佳さん。

そんな振る舞いをするあなたが何故か今とても怖いです。

「さて、ここからが本題なんですが……」

キンコーンカーンコーン！

「よっしゃ、お前ら席に着け」

チャイムが鳴ると同時に先生が入ってきた。

なんとかこの場は助かった。

……。

……。

そう思ったのも束の間で、今日に限ってHRが早くに終わり、再びピンチ到来。

どうする俺？

「裕樹さん」

「俺、トイレ行ってくるから！」

古典的な手を使わせてもらった。

俺はそそくさと教室を出て行き、用を足す。

そして授業開始のチャイムが鳴った瞬間、再び教室に戻る。

……

……

…

——1 限目終了。

「裕樹さん」

「授業のことで先生に質問したいことがあるから！」

——2 限目終了。

「裕樹さん」

「またトイレに！」

——3限目終了。

「裕樹さん」

「職員室にプリント届けないといけないから！」

——昼休み。

「裕樹さん」

「別の奴と約束してたから！」

——なんやかんやで放課後。

「裕樹さん」

「ちょっと先生に呼び出されているから！」

こんな感じで今日一日ずっと彼女から逃げていた。

もちろんこんな事を毎日やろうだなんて思っていない。

だが、昨日の今日で顔合わせではならないと感じていた。

せめて今日一日だけでもブランクを挟まないと……。

そんなことを考えながら、適当に校舎を歩いていた。

今現在、自分が校舎どの辺りを歩いているのかさっぱり分からない。
忘れている人もいるかもしれないが、俺は方向音痴なのだ。

部屋の上にあるプレートを見ても見覚えの無いものばかり。

ふと、どこからか良い匂いがした。

しばらく歩いてみると『家庭科調理室』と書かれたプレートを発見。

おそらく料理部が何か作っているのだろう。

……ん？何だ？

何かとてつもなく重要なことを忘れているような気がする。

ポンポン

背後から誰かに肩を叩かれた。

そこで俺は一つの心当たりに辿り着いた。

この予想が外れてくれますようにと祈りつつ振り返る。

「奇遇ね、裕樹君」

そこには紫苑さんがいた。

そう。料理部に一也と紫苑さんが入部していることをすっかり忘れていたのだ。

昨日、今日のことを根掘り葉掘り聞かれるに違いない。

「おお奇遇だな。それじゃ俺は帰るから部活頑張つてな」

「うん、ありがとね……って、そんなアホな手に引つかかると思ってるの?」

「ですよー」

「里佳と何があつたのかなあ?」

「ナニモ、ナカッタヨ」

「そう。やっぱり何かあつたのね」

「イヤ、ダカラ……」

「ああん? (- - #)」

「ひい!!」

「いいから、お姉さんに全てを話さない」

結局、紫苑さんからも逃げてきた俺。

自分自身がとても情けなかった。

もういい、早く帰ろう。さっさと上履きを脱いで、靴に履き替える。

ふと、外からザーっという音が聞こえてきた。

まさかと思い顔を上げて外を見てみると、案の定、雨が降っている。

まあ、こんなこともあるのかと折り畳み傘は常備している。

しかし、そうでない者もいるらしい。

女の子が一人、ぼんやりと雨が降る空を眺めていた。

里佳さんだ。

自分でも気づかぬ間に、後姿を見ただけで彼女を彼女だと認識できるようにになっていた。

どうして俺はこんなにも惹かれているのだろう。

楓さんと重なる部分があるからだろうか。

それとも……。

「傘、無いのか？」

「え？」

こちらを振り向き、声の主が俺だと分かったと彼女は目を丸くした。

「折り畳み傘で良ければ、俺のを貸してやる」

「え？でも、それだと裕樹さんの分が……」

「俺は2本持つてるんだ」

まあ、もちろん持っていないけどな。

「……嘘つき」

「え？」

「本当に2本あるなら、今この場で見せてください」

「……………」

「やっぱり嘘でしたか」

「どうして分かった？」

「これといった根拠は無いんです。ただ、なんとなく」

「……そっか」

俺って嘘つくのが下手だったのだろうか。

それとも、彼女には本気で嘘をつけることができなかったのか。

「だったら、一緒に帰るか？」

「……え？」

「1本だけならあるんだ。少々狭いけど」

「でも……私は裕樹さんを怒らせるようなことを」

「いや、違うんだ。あれはただ、俺が変わったというか何と云うか」

「怒ってないんですか？」

「うん、全然。だからさ、その、一緒に帰らない？」

「……はい！」

今日は顔を合わせまいと思ってたのにな……。

こうなったのは全部あの夢のせいだ。

とりあえずそう思って割り切ることにした。

だから、せめて今だけは……。

はい、それだけです

「……………はあ」

これで何度目のため息だろう。

そもそも何で私はこんなにため息なんかついているの？

そんなの言うまでもない。荻野裕樹、その人のせいだ。

でも、どうしてこんなに気になるのだろうか？

そこが自分でも良くわからない。

「考えるだけ無駄ですかね」

紫苑さんに借りた本でも読んでいよう。

机の上に置いてあったはずだ。

………そういえば、あのとき裕樹さんは何故この本を渡してすぐに帰ってしまったのだろうか？

自分が変わったとか言ってたけど、絶対私の所為だよな。

「……………はあ」

また、考えてしまった。

ふるふると頭を振って思念を追い出す。

そして手に取った本を開いてみた。

『異性との相性が分かる占い』

「……………」

ブックカバーを取り払ってみた。表紙から察するに占いの本らしい。

私、あまり占いなんて信じない派なのに。

紫苑さんっては何考えてるんだろう。

でも、さっきの項目、ちょっと気になる……。

目次からもう一度さっきのサブタイトルを探してみる。

……見つけた。早速読んでみる。

『其の一、あなたの使っている歯磨き粉と同じのを使っているならば、その人との相性はバッチリです!』

何故に歯磨き粉？

ロマン性の欠片も無いその占いに不信感を覚えた。

まあ、一応聞くだけ聞いてみようかな。

私の使っているのは『PCクリニカン』だったよね。

——翌日、教室にて。

「裕樹さん」

「うん？」

「つかぬことを聞きますが、歯磨き粉って何を使っていますか？」

……歯磨き粉？何故そんなこと聞くんだろう？

不可解な質問に首を傾げながら、自分の歯磨き粉が何だったかを思い出す。

「えっと、確か『PCクリニカン』だったかな」

「……そうですか」

「それがどうかしたのか？」

「いえ別に。それでは」

「え？それだけ？」

「はい、それだけです」

そう言つて里佳さんはどこかに行つてしまった。

……何だつたんだ？

「……偶然ですよ、ね、きっと」

うん。そうに決まってる。

そもそも何故に齒磨き粉で相性を占うんだらう？

その時点でちょっと、いや、かなり怪しい感じがする。

もつと他のが無いのか見てみよう。

『其の二、一番最初に博士からもらったのは何タイプ？それが同じなら相性バツチリです！』

今度はゲームネタ？

またも意味不明な方法に不信感が募っていく。

まあ、一応聞くだけ聞いてみるか。

そういえば私はいつも草タイプだったなあ。

状態異常のワザが使えるから好きなんだよね。

特に初代は最初の2つのジム戦が楽になるしね。

——さらに翌日、再び教室にて。

「裕樹さん」

「うん？」

「裕樹さんは最初、博士から何タイプのモンスター貰ってましたか？」

……は？何タイプのモンスター？

ああ、もしかしてあのゲームの話だろうか。

「最初はいつも草タイプだったな。ほら、相手を毒とか麻痺にでき
て便利じゃないか」

「ですよねっ！その気持ち分かります！」

「それにホラ、初代はブキミダネをもらって最初の2つジム戦が余
裕で勝てるだろ」

「そうなんですよ！……あ、いえ、ありがとございました」

「今回もそれだけ？」

「はい、それだけです」

そう言って里佳さんはどこかに行ってしまった。

かなり謎過ぎる。

昨日の歯磨き粉もそうだが、質問の意図がさっぱり分からない。

まあ、特に意味のないことを人に尋ねることは俺だつてあるもんな。

それにしても、里佳さんもあのゲームやってるのにちょっと驚いた。
何か微妙にテンション上がったし、結構好きなんだろうか。

今度、通信交換でもしようかな。

さっさとゴウリキー進化させたいし。

「うん。答えのみならず理由も同じとは……偶然、でしょうか？」
まあ、使っているものが同じということは感性が似ていると捉える
こともできる。

そういう意味で相性が良いと言っているのかもしれない。

まあ、結局のところ占いだ。

当たるも八卦、当たらぬも八卦だろう。

そうは思っているがパラパラと本をめくってみる。

「後半はおまじないの章だったんですね」

まあ、占いとおまじないは似たようなものだからなあ。

……どれどれ。

『異性との距離を縮めるおまじない』

如何にもそれっぽいサブタイトルだった。

さて、どんなことすればいいのだろう。

いつの間にか自分でも気付かぬうちに興味を抱いていた。

やり方の説明文に目を通す。

『シャーペンの芯を相手の人にあげればOK!』

シャーペンの芯をあげる？

相手が既に持ってたかどうかすればいいんだろう？

『既に持っても強引に渡しましょー!』

あ、そうですね。

相変わらずよく分からない方法を授けてくる本である。

これで効果無かったらもう紫苑さんに返そう。

……。

……。

効果があったらもうちょっと借りておこうかな。

——さらにその翌日、またまた教室にて。

「裕樹さん」

「うん？」

「その、シャーペンの芯って足りていますか？」

「シャーペンの芯？」

どうやら不可解な質問シリーズはまだ続いているらしい。

意味不明さに磨きがかかってきたなと思いつつ、シャーペンを手にとって軽く振ってみる。

中からシャカシャカと芯の音が聞こえてきた。

「うん。充分足りてるな」

「……………」

「どうかした？」

「この芯、私からのプレゼントです」

そう言っただけで彼女は一本の芯を強引に渡そうとする。

「……………は？いや、だから……………」

「受け取ってくれないと紫苑さんに泣きつきます」

「喜んで受け取ります」

先日誤って調理室に足を運んだときの恐怖を思い出した。

あのときの紫苑さんの顔は怖かった。

何かに例えるなら般若だろう。

それはそうと、何でシャーペンの芯くれたんだろう？

これって自ら進んで人にあげるものじゃないよな？

「まあ……ありがとう」

「どういたしまして」

「……もしかして、それだけ？」

「はい、それだけです」

そう言って里佳さんはどこかに行ってしまった。

いまいち行動の目的が良く分からない。

近頃の彼女は一体何をやっているのだろう。

まあ、あんまり深く気にしないでおこう。

というか、気にするだけ無駄なように思える。

あ、そうだ。授業の準備をしないと。

次は確か英語だっけ。

机の中を漁ってみる。だが、英語の教科書が見当たらない。

カバンの中も漁ってみたが、結局見当たらない。

完全に家に忘れてしまったな、これは。

……

……

…

「というわけで教科書見せてほしいんだけど」

「分かりました」

俺の机と里佳さんの机をくつつける。

彼女の教科書を真ん中に置き、寄り添ってみる形になった。

なんというか、距離が近いな。

「……まさか、距離が縮まるってこれのこと？」

「うん？何か言った？」

「いえ、なんでもありません」

昔になんかあったやろ？

ジリリリリリリリリリリリッ！！

一日の始まりとも呼べる朝をこんなにも不快な気分でも迎えても良いものだろうか。

少しでも目覚めが好きになれるようにと、ケータイのアラームにお気に入りの曲を設定していた時期もあった。

だが、やはり眠たいときに好きな曲を聴いても不快感が募るばかり。

結局はその曲が嫌いになっただけに終わってしまった。

ジリリリリリリリリリリリリッ！！

「起きるよ、起きますよ、起きればいいんでしょっ!？」

聞く耳持たない目覚まし時計に向かって三段活用を叫ぶ。

不満を声にしながらスイッチを押した。

それにしても、快適な朝を送るにはどうすればいいのだろうか。

「ラジオ体操でもしてみっか」

いち、にい、さん、しー。にい、にい、さん、しー。
いち、にい、さん、しー。にい、にい、さん、しー。

バキッ！

机の角に勢いよく手の甲をぶつけてしまった。

如何にして快適な朝を送るか、という議題はきれいさっぱり諦めて
身支度し、家を出た。

残暑もようやく落ち着いてきて、随分と過ごし易くなってきた。

見上げた空は高く、食欲はいつもより大きくなる。

「天高く馬肥ゆる秋ってやつだな」

「女性の前でその諺は禁止です」

「おわっ!？」

「今のリアクションは少し傷つきました。おはようございます」

「いや、急に声を掛けられたもんだからさ。おはようござえます」

「急じゃない声の掛け方ってあるんでしょうか？」

それ、前にも誰かに言われたぞ。

「例えば、俺の視界に入ってから声を掛けるとか」

「まあ、一理ありますね」

納得していただいたようで何よりだ。

気づけばいつの間にか学校に到着していた。

「おっす!」

「おわっ!？」

「な、なんや? そんな驚かんでもええやん」

振り向くとそこには一也がいた。

最近こんなのばっかだな……。

皆で俺を驚かして寿命を縮めようとしているのではなからうか。

だとしたら高レベルないじめだ。

「いじめ、かつこ悪いよ」

「裕樹さんはいきなり何を言ってるんでしょうか？」

「さあ、まだ寝ぼけとるんちゃうか？」

……おもいつきり聞こえてるぞ。

——いきなり放課後。

里佳さんの家、もとい『里佳ちゃんハウス』で将棋をしていた。

何故に将棋をしているのか、それは聞かないでいただきたい。

「王手！しかも詰み！」

「ぐぬぬう」

「まあ、カズつちがあたしに勝つなんて100年早いわよね」

「もう一回もう一回！もう一回もう一回！」

「HANABIっぽく言ってもダメ。敗者は勝者の言うことを一つ聞く約束だったわね」

「へい……」

エセ関西人VS恐怖の女、この対局は『恐怖の女』の勝ちに終わった。

まあ、予想通りというか当然というか。

「ぼーっとしないでください。次は裕樹さんの番ですよ」

「あ、うん。じゃあ、こいつで『飛車』を取るよ。そして成る」

「あ」

里佳さんは俺の取った『飛車』を寂しそうな目で見つめている。

そんな切ない目をしないでくれよ……。

悪いことしてないのに、罪悪感が湧いてきちゃうでしょうが。

「じゃあ……ここをこうしますね」

「んー」

っていうかさ、さつきから気になっていることがあるんだよな。

「じゃあ、ここをこうだ！」

俺たち、将棋盤を床に置いて対局してるんですよ。

「かかりましたね。これで『角』取りです」

そうするとですね、シヨールパンを穿いている里佳さんの生足に目が
いつてしまっんですね。

「なるほど。じゃあ俺はここを攻める！」

目の毒というか、目の保養というか、やばいというか。

「ああん……」

頼むからそんな声出さないでくれ。心臓に悪いから。

「うーん。じゃあ、ここをこうします」

キラーン！

俺は手元にあった『金』を取り出した。

「王手！詰み！」

「……」

「……」

「……負けました」

年頃の男子には悩ましかった時間は勝利で幕を閉じた。

頭がいっぱいいっぱいで手加減する余裕がなかったです、はい。

「うう。強すぎます……」

ああああ。そんな目で俺を見ないで。

「あ、裕樹君が勝ったのね？ということは里佳に卑猥な命令を……」

「そんなことするかっ！俺ほど硬派な人間はいないぞ」

「できれば倫理に反しない命令にしてくださいね」

「里佳さん、君は今俺の言ったことの半分も理解してないのね……」

「そんなこと言って、さっきは里佳の素足をじろじろ見てたじゃない」
「い」

「えっ！ゆ、裕樹さん！？」

顔を赤くしてこっちを睨んでくる里佳さん。

「な！いや、それはだな、別に意識して見てたわけじゃなくてだな」

「……えっち」

「だから違うんだあー!!」

将棋が一段落ついたのでお菓子を持ってくると女二人はキッチンへ。

そして部屋に残されたのが男二人。

「ところでやな、裕樹」

「うん？」

「単刀直入に聞くけど、お前、千堂のこと好きなんか？」

「本当に単刀直入だな。どうしてそんなことを聞くんだ？」

「他意はあらへんよ。純粋な好奇心やな」

「……少なくとも、今の関係から変わることは無いだろうな」

俺の答えを聞いて一也は目を見開いた。

そんなにこの答えが意外だったのだろうか。

「ふうん。俺は千堂のことを好きなんか？と聞いたんやけどな」

「……………」

「お前、昔になんかあったやろ？」

「どうしてそう思うんだ？」

「肯定でも否定でもあらへんだ。お前は千堂を拒絶したやろ」

「拒絶って大げさだな。大体、俺が言った答えは否定に含まれるんじゃないか？」

「『好き』の否定は『好きではない』やな。お前の答えは否定とは違うわ」

こいつ、普段は抜けているようで案外鋭い所をついてくる。

実は案外切れ者だったりして。

「まあ、そこから察するに昔に女絡みで何かあったんちゃうか思ってたな」

「俺の言い方が悪かった。」今のところは”変わる気はない、とい

うことだ」

「……さようか」

もう諦めたのか、それ以上は聞いてこなかった。

ならばこちらも少々反撃してやろう。

「お前こそ、どうなんだ？」

「ん？」

「紫苑さんのこと、好きなのか？」

「はあ？何で俺があいつとやねん？そもそも、俺とあいつはただのケンカ友達っちゅうか……」

「急に饒舌になったな、一也」

「……………」

「おまたせ」。お菓子とジュース持ってきたよ」

なんとも一也を救うタイミングで二人が帰ってきてしまった。

もうちょっと弄りたかったのに。

「おー。早速オレンジジュース貰っわ」

「ほいほい。どうぞ」

まあ、きっとこの二人なら将来は大丈夫だろう。

俺が余計なお節介をしなくても、いつかは結ばれる。

「裕樹さん。飲まないんですか？」

「いや、もううふ」

でも、俺達は……俺と里佳さんは違う。

「分かりました。はい、どうぞ」

「ありがとう」

変に意識したせいか、里佳さんの顔を微妙に直視できなかった。

——
帰り際。

「よりもよってまた雨かよ」

「結構降ってますね」

まあ、季節は秋だから秋雨前線が悪天をもたらしているのだろう。

最悪なことに今日は傘を持っていない。

どうやって帰ればいいんだろう。

「あたしは折り畳み傘持ってるんだよね。カズっち、入ってく？」

「ええんか!？」

「良かったなあー也くんよ」

さっきのことを踏まえて含みたつぶりで嫌味を言う。

「お前こそ千堂に送ってもらったらどうや。もちろん相合傘で」

女二人に聞こえない声で、嫌味たつぶりで返された。

「ほな、俺たちはもう行くわ。さいならー」

「またねー」

二人は仲良く、かどうかは知らないが、相合傘で帰っていった。

.....。

さて、俺は一体どうしましょうかね。

「裕樹さん、傘貸しましょうか？」

「え？ああ、そうだな。うん」

「待っててくださいね」

里佳さんは一旦家の中に入ってから傘を持って再び出てきた。

どうぞ、と傘を渡されたとき、何故だか寂しい気持ちになった。

もしかして俺は相合傘を期待していたのだろうか。

心のどこかで里佳さんと一緒に居たい、と。

「どうかしましたか？」

「……いや、なんでもない。じゃあな」

思ってはならない。期待してはいけない。

それでも一人だと傘の中が妙に広く感じた。

久しぶりだね

——学校

将来において一体何の役に立つのか分からない数学に体力を費やしていた。

授業というよりは演習なので、考えて問題を解かなければならない。とりわけ現在やっている数学Bの内容が謎すぎてお手上げ状態。

特に俺は文系なので、よりいつそう嫌悪感を抱いている。

なんだよ数学的帰納法って。意味不明ですわ。

ちらつと隣を見ると里佳さんはスラスラと問題を解いている。

俺の見ている限り、シャーペンが止まっている時間はほとんど無い。

何故そんなに数学ができるんですかね？

「数学って最小限覚えるべきことを覚えれば応用が利くから得意なんですよ」

「……は？」

どんな読心術を使ったのか、頭のなかで疑問を抱いていたことを返答する里佳さん。

あなたはまさかエスパークタイプか？

「裕樹さんから尋ねてきたのに、その返しは何ですか」

「……もしかしてモノローグが声に出てた？」

「自覚が無かったんですか？」

「あ、ああ……」

「保健室、行きますか？」

「いや、大丈夫」

何気にそれって酷くない？本当に心配してくれてんのかな。

「ちなみに私はエスパークタイプではありません。強いて言うならノーマルタイプです」

あ、そこも声に出てたのね。失礼しました。

って、そんなことはどうでもいいんだよ！

「あのさ、数学的帰納法がよく分からないんだけど教えてくれない？」

「帰納法ですか……」

俺に説明する手立てを考えているのか、首を少しひねっている。

その仕草に少しドキツとしてしまった。

「そうですね……そもそも帰納法がどういうものか説明できますか？」

「無理だな」

「即答でしたね。大体の問題は、とにかくまず $N \parallel 1$ を証明するんです」

「ああ、それは何となく分かるよ」

「その後、 $N \parallel K$ が成り立つと仮定したとき $N \parallel K + 1$ も成り立つことを言えばそれで終わりです」

「何でそれで証明になるのか良く分からないんだが」

「いいですか？最初に $N \parallel 1$ を証明したんですから『 $N \parallel 1$ が成り立つとき $N \parallel 2$ も成り立つ』ということになりますよね」

「あー！それで $N \parallel 2$ が成り立つから $N \parallel 3$ も成り立ち、更に $N \parallel 4$ 以降も次々に成り立つってこと？」

「そういうことです。だから整数じゃないと帰納法は使えないんですよ」

なるほど。里佳さんの説明は実に分かりやすい。

数学の先生は解法に熱を入れていて、証明の本質をおろそかにして

たからダメだったんだな。

「ホントにありがとう！おかげで謎が一気に氷解した」

「別に大したことじゃないですよ」

「そんなことないって。借りが1つできたな」

「大げさです」

「いや、数学でこんなに気分が良くなったのは10年ぶりぐらいなんだよ」

「10年ぶりって……クスクス。小学校低学年じゃないですか」

トクン！

やばい……。笑った顔がすごく可愛い。

ええいつ！！静まれ俺の心臓！！

「か、重ね重ね悪いんだが、数列についても教えてくれないかなあ？」

「何か声が変わってませんか？」

「気のせい気のせい」

「まあ、数列にも等差、等比とか漸化式とか色々あるんですが」

「……どれも分からん」

「さすがに全部教える時間は無いですね」

「ですよー」

改めて数学の理解力の無さに絶望した。

こんなんでセンター試験は大丈夫なんだろうか。

一年後の自分を想像したら少し、いや、かなり寒気がした。

「いかん……いかんぞ……」

「大丈夫ですか？」

「センター試験で失敗したら二次試験で……」
「ごによごによ」

「落ち着いてください。自分で『ごによごによ』って言うちゃって
ます」

「マジで！？かなり自意識崩壊してきたな」

「自意識過剰なら分かりますが、崩壊って……」

「留年したら更にもう一年、数学とお付き合いか……はははっ」

「はあ……明日は土曜ですから勉強会しますか？」

——土曜日

そんなこんなで俺の家で勉強会が開催された。

「っていつか何故俺の家？里佳ちゃんハウ……げぼん。じゃなくて、里佳さんの家でやればいいじゃん」

「もっと汚いと思ってたんですが、案外片付いているんですね」

「人の話聞してる？」

「さて、早速ですが始めましょうか」

「全く聞く耳持たないのね」

「裕樹さんは二回も私の家に来たじゃありませんか」

あ、それもそうか。って聞いているならさっさと答えてくれよ。

何この微妙な態度？

いつもより変だな。あ、いや、いつもは変じゃないんだが。

あ、もしかして里佳さん……。

「なあ」

「はい、何ですか？」

「もしかして、緊張してる？」

「……してません。全然してません。微塵もしてませえん」

「そ、そうか」

妙に力が入ってたのは気のせいではないだろう。

しかも最後だけ『ませえん』ってなってたし。

まあ、ここは男の俺が優しくリードしてあげないとな。

「何か飲み物で飲むかね？」

「いえ、大丈夫です。ペットボトルのお茶持ってきましたから」

「左様ですか……」

ものの見事に失敗した。なんだか、ものすごく恥ずかしい。

まあ、いいや。気を取り直して勉強開始だ。

早速数学に取り組んでみる。

——1時間後

「うがあああ——!!」

「きゃっ!……な、何ですか急に」

「さっぱり分かん」

「それならそうと私に言ってください。何のための勉強会だと思ってるんですか!」

「は、はい」

「それで、どこが分からないんですか?」

「三次方程式のグラフがX軸で3点とも交わる為の条件」

「 $(\text{極大値}) \times (\text{極小値}) < 0$ を解けば良いだけでしょ?」

「何でそんな条件になるのか意味不明なんだってば」

「んー。3点交わったグラフを適当に書いてみてください。Xの3乗の係数が正のときのと負のときのと」

「……こう?」

「ここで極値に注目してください。極大値が正なら極小値が負、極大値が負なら極小値が正になっているでしょう?」

「だから (極大値) × (極小値) < 0 が条件なのか」

「そういうことです」

「分かりやすい。実に分かりやすいよ。」

「っていうか、何で教科書にそのことが書いてないんだよ。」

「問題集の解答にも説明が無いし、教材も世の末だな。」

「いや、ホントにありがとう」

「どういたしまして」

「ちゃんと理解したから、すこぶる気分が良い。」

「これこそ数学の醍醐味なのだろうが、あいにく一人でそれを味わったことがあまりない。」

むしろ解けないほうが多いから苦手になったんだろうな。

さて、この問題も正解したし……。

「そろそろ休憩するか」

「そうですね。私もキリが良いのでここらで休憩します」

ピンポン♪

いまだに聞いたことのなかった呼び鈴が鳴った。

誰だろう？この家を知っている奴はほとんどいないはず。

「ちょっと行ってくる」

部屋を出て玄関に向かう。

俺の両親はそもそも遠くにいるはずだし……。

うーむ。心当たりゼロ。

まあ、新聞の勧誘か宅配便あたりかなと思いつつ、鍵を外してドアを開けた。

「こんにちわ。久しぶりだね」

「……………え？」

そこには思いもよらない人がいた。

それならいいんだ。良かったよ

「久しぶりだね。最後に会ったのは何年前になるのかな？」

「どうやってマンションの中に入った？」

「うーん、そうねえ。会いたって気持ちに通じたんじゃないかな？」

「はっ……そうか、俺の親に暗証番号を聞いたんだな。いや、それにしたって何で急に……」

「急に会いたくなつたから、かな？」

このままでは何を問いかけても収拾が付きそうにない。

ならば心を鬼にして一言。

「帰ってくれ」

きっぱりと言ってやった。

「ヤダ」

きっぱりと言い返された。

「帰りなさい」

「嫌よ」

「いい加減にしるよ、麗奈^{れいな}」

「嫌だつて言ってるじゃないの、ゆっき」

この水掛け論は一体いつまで続くのだろう。

そう思った矢先、次の麗奈の言葉であっさりと終わった。

「ところでさ、それって女物の靴だよね？」

「むっ……」

そういえば里佳さんが来てたんじゃないか！

マズい。非常によろしくない。

このまま二人を会わせたら一体どんなことになるのか、考えただけでも恐ろしい。

「ふーん。楓って人の次はその人なんだ？」

そんな思考は彼女の冷たい言葉でどうでも良くなった。

「……………」

「いいんじゃないかな？あれからもう3年ぐらい経つし」

「……………違う」

「ん？」

「そんなんじゃない。ここにいる人とは、そんな関係じゃ……ない」

「ふーん。その『ここにいる人』っていうのは、あなたの後ろにいる人？」

「……え？」

振り返ると、そこには里佳さんがいた。

一体いつの間にいたんだろう。

「あの……す、すみません。その、怒鳴り声が聞こえてきたので……」

里佳さんは居心地が悪そうに、視線を逸らしながらそう答えた。

なんとも嫌な空気が流れる。

「それで、あなたの名前は？」

「え？は、はいっ！？」

いきなりの質問に里佳さんは動揺する。

大抵の人は初見で麗奈のペースにはついていけない。

「だから名前よ。あなたの名前は？」

「えと、千堂里佳です」

「里佳ちゃんだね。あたしは一堂麗奈^{いちでい}ね。よろしく」

「よろしくお願いします」

「それで、里佳ちゃんは何でゆっきの家にいるの？」

「ゆっき？」

「あー、ゆっきってというのはコレのことね」

と、俺の方を指差しながら答える麗奈。

コレって言うな。

「今日は勉強会で来たんです」

「勉強会？……ということは里佳ちゃんは理系？」

「そうですけど、どうして私が理系だと？」

「だって、ゆっきは数学がダメダメだよな？勉強会するんだから、あなたは数学ができるのになって」

「頭の回転が速いんですね」

「まあね〜」

「っていうか、俺を差し置いて勝手に話すな！」

その後、裕樹さんはケーキを買いに行った。

正確には麗奈さんに無理やり買いに行かされたというべきか。

裕樹さんの家はマンションの五階だから、買い物にも少し時間がかかる。

そんな中、リビングには私と麗奈さんの二人だけ。

「あの……少しいいですか？」

「うん？」

さっきからのすごく気になっていることが1つ。

大事なことを私は知らないでいる。

「あなたと裕樹さんは一体どういう間柄なんですか？」

「あれ？言ってなかったかな？」

「はい。なんか裕樹さんのことよく知ってるようですし……」

「気になる？」

気になる。裕樹さんをあだ名で呼ぶほど親しい関係ということは間違いない。

楓さんでもないこの人は、裕樹さんにとってどんな存在なんだろう。

「……少しだけ」

「そっか。実はあたしね……ゆっきの元カノなの」

「ええっ!？」

「……………ぷ、ぷくく。あっははははは!!」

突然、麗奈さんは苦しそうに笑い出した。

「ごめんごめん、今はウソ。元カノじゃなくて、あたしはゆっきの従姉ね」

「……驚かさないでください」

「ホントにごめんね。あなたがどんな反応するか見てみたかったの」

「反応ですか？」

「単刀直入に訊くけど、あなたはゆっきのこと好きなのかな？」

「いえ、私は、その……」

「それなら忠告しておくわ。中途半端な気持ちで彼に近づかないほうがいいわよ」

「え？」

「彼に近づくなら、覚悟することね」

彼女の少し冷えた声が真剣さを醸し出していた。

どうして？ どうして裕樹さんに近づかないほうがいいの？

覚悟なんて言葉、普通なら使わない。

あなたには昔、何があったの？

……。

……。

知りたい。

その答えを私は知りたい。どんなものだとしても。

「教えてください。裕樹さんのこと」

「……そう。ならもう一度訊くわ。あなたはゆっきのこと好きなの？」

「はい。好きです」

「いいわ。あなたに教えてあげる。彼に何があったのかをね」

.....

.....

.....

.....

...

「——そういうわけで、結局その楓って人と別れたの」

「そんなことがあったんですか……」

「ゆっきの意志が弱かったから、引越しに反対できなかったのは自業自得だね」

ようやく明かされた裕樹さんの過去。

確かに彼は辛い目にあったのかもしれないが……。

「でも、その出来事によってそんなに傷ついたんですか？ 近づくには覚悟がいるなんて」

「確かに、今の話を聞いただけじゃそうは思わないよね」

「まだ、何か続きがあるんですか？」

「うん。実は……」

『ただいまー！買って来たぞ！』

玄関からそんな声が聞こえてきて、麗奈さんの言葉は遮られた。

裕樹さんが帰ってきてしまったらしい。

「この続きはゆっきに直接聞きなさい」

「……私に教えてくれるでしょうか？」

「大丈夫よ。きっと」

「……はい」

「ゆっきを救ってあげてね。あたしはどんなに頑張ってもだめだったから……」

「え？」

ガチャ

その言葉の真意を聞く前にリビングのドアが開いた。

もうこれ以上彼女に教えてもらうことはできない。

訊くしかない。

他の誰でもなく裕樹さんから。

「それじゃ里佳ちゃん。後はよろしくねー」

「え？あ、はい」

「ばいばーい！」

そう言つて麗奈さんは帰つていった。

裕樹さんはそれを硬直したまま見過ごして数秒。

ふと我に返つたのか、その口を開いた。

「……な、なんのために俺はケーキ買いに行かされたんだあー！
！」

「まったく、あいつは昔からああなんだ。思考回路が常人の斜め上を行くんだ」

「……あはは。でも、そんなに悪い人ではないですよ」

「誰も悪い奴なんて言っていない。変な奴って言っているんだ」

買ってきたチョコケーキを頬張る。

上品な甘さが口の中いっぱいに広がった。

「それでさ、もぐもぐ……俺の居ない間に……ごくんっ、どんな話してたんだ？」

「食べながら喋らないでください」

麗奈のことだ、あいつに何を吹き込まれたのか気になってしょうがない。

「今、飲み込んだ。さあ、答えなさいな」

すると里佳さんは大きめのケーキの欠片をフォークに刺して口へ。

「もぐもぐもぐ」

「いや、明らかに俺が質問してから口に入れたよな!？」

「気のせいれす」

ヒマワリの種を頬張っているハムスターのような頬がとてもキュー
ト。

この人は何でこんなに可愛いんだろう。

「こくんっ……」

「飲み込んだな？さて、じっくり聞かせてもらおうか」

「わぁ。このモンブランも美味しそうですね」

フォークが新たなターゲットを突き刺そうとしていた。

「させるかっ!!」

すぐさま手を伸ばし、そのフォークを里佳さんの手ごと掴んだ。

……掴んだ。

掴んでしまいました。

「~~~~~!!」

里佳さんの顔が赤くなり、同時に俺も顔が熱くなる。

慌ててその手を離れた。お互いに視線はおろか、顔まで逸らして照れる。

時計の針の刻む音が大きく聞こえてくる。

もうダメ。この空気には堪えられん。

「……気になりますか？」

「ん？」

「私と麗奈さんが何を話していたか、気になりますか？」

「……ああ」

いきなり真剣な顔つきになったので予感した。

おそらく俺の過去の話だと。

そして今日でこの関係が崩れてしまうと。

「楓さんとのことを聞きました」

問題は彼女がどこまで知っているか。

おそらく大体のことは麗奈から聞いたに違いない。

「全て聞いたわけではありません。私が教えてもらったのはその人に別れを告げたところまでです」

「……そうか」

やはり麗奈は肝心の部分を話していないようだ。

もつとも、そんなこと里佳さんの様子を見れば分かるが。

「裕樹さんはその人のこと、今でも好きなんですか？」

里佳さんは恐る恐る、呟くように質問してきた。

確かにその問いは尤もだが、俺にとっては残酷なものだった。

「ああ。今も、これからもきつと好きなんだろうな」

「だったら何故こんな所にいるんですか!？」

「……………」

「そんなに……そんなにその人が好きなら、よりを戻せばいいじゃないですか!」

里佳さんの言葉が痛い。

まるでナイフか何かで刺されたかのように。

「もう、いまさら間に合わないさ」

「そんなの、やってみなくちゃ分からないでしょう!？」

そして俺もまた、彼女に言葉のナイフを向けなければならない。

たとえば、彼女が傷つくと分かっている。

たとえば、俺自身が傷つくと知っていても。

「もう、いないんだ」

「え？」

「楓さんは……もう、この世にはいないんだよ」

俺が里佳さんを拒んできた理由。

「なん、で？どう、して？」

「俺が彼女に別れを告げたその日、彼女は事故に遭って亡くなったんだ」

俺が自分の気持ちを殺してきた理由。

「そんな……」

「だからさ、もう何があったって間に合わないんだよ」

俺が人を好きになっただけいけない理由。

「もう、二度と謝ることさえできないんだ」

「わ、私。ごめん、なさい……」

「何で里佳さんが謝るの？」

「だって……私、無神経な……こと、言って……」

「何で里佳さんが泣くの？」

「うう……ごめ……なさい。ごめん……なさい……」

俺が里佳さんを好きになっではいけない理由。

それは背負っている罪があるから。

俺は、俺を赦すことができないから。

だから俺は、里佳さんの側にはいられない。

彼女の側にはいない。

「ごめんな。里佳さんの気持ちには応えられない。悪いけど――」

「言ってますん」

「え？」

「誰も……誰もあなたを好きだなんて言ってますんっ！」

「――そうか。それならいいんだ。良かったよ、俺なんかを好きにならなくて」

パシーーン！！！！

そんな音が響いて数秒後、俺は彼女に頬を引っ叩かれたのだと気づく。

見かけによらず、威力がそこそこあった。

頬を押さえながら彼女に向き直ると、その顔には大粒の涙が伝っていた。

「……さようなら、裕樹さん」

「ああ」

彼女は荷物を持って玄関に続くドアの向こうへ行ってしまった。

そうだ。これでいい。

いつかこうなるときが必ずやってくると思っていた。

里佳さんを泣かせてしまうと。

そして、俺自身も涙すると。

そんなこと、とっくに分かっていたんだ。

どうせ悪い方やるな

プルルルル。プルルルル——ピッ！

「もしもし」

『……荻野だな！？落ち着いて聞けよ！？大変なことになってるんだっ——！』

電話を掛けてきたのは俺のクラスメイトだ。

「いや、まずはお前が落ち着けよ」

『えっと、二ノ宮楓が事故に遭ったんだ。病院へ運ばれたんだが、間もなく息を引き取ったらしい』

「……………え？」

……………。

……………。

……………。

親に無理を言って引越しを先延ばしにしてもらい、葬式に行った。

俺に同情してくれるクラスメイトも多々いた。

どうやら俺と楓さんの仲は意外と広まっていたらしい。

でも、その同情はかえって鬱陶しかった。

別に同情してもらうことが嫌なんじゃない。

皆、本当のことを知らないからだ。

事故の原因は聞いた話によると、楓さんの前方不注意だったらしい。

そして事故に遭う前、彼女はいつも考え事をしていたという。

俺はすぐに悟った。

自分のせいで彼女が死んだのだ、と。

俺が酷いことを言っただけに彼女は傷ついて……。

そんなことがあったことを知らないクラスメイトは、俺に優しく話しかけてくる。

心がズタズタになった。

もう何もかもが嫌になって俺は逃げ続けた。

逃げ続けたはずだったのに。

それなのに、俺はまた同じ過ちを犯してしまった。

千堂里佳。

「……嫌われたらうな」

もつと最初から冷たくしておけば良かった。

引越さなくなったことで、少々浮かれていたのかもしれない。

誰かに恋をするなんて許されないと分かっているのに。

いつの間にか深い場所まで踏み込んでしまっていた。

ならば、その場から引き返せばいい。

たったそれだけのこと。

ふと時計を見ると8時半過ぎだった。

学校に間に合いそうにないし、今日は何もする気になれない。

こういう日は寝ているに限る。

『風邪引いたんで休むわ』

送信、と。

里佳さんは学校に来てるのだろうか。

それとも俺のように休むのかな？

……。

……。

何また彼女のこと考えているんだ、俺は。

もういい、寝よう。おやすみなさい。

一方その頃、教室ではこんなやりとりがあった。

ブブー……ブブー……。

「カズっち。オナラするならトイレでしてきなさい」

「違うわ！ケータイ震えただけや！分かってて言っとなるやろ！？」

「それで誰から？」

紫苑は事あることに一也をからかう趣味がある。

今日も今日とて一也は弄ばれていた。

「はぁ……。えーっと、裕樹が風邪引いたんやと」

「裕樹君も？」

「ん？まさか千堂もか？」

「うん。風邪引いたって、さっき電話で」

一也はため息を一つ。

「……たく二人して同じ嘘つきよって」

「考えられるのはサボってイチャイチャしてるか、喧嘩して互いに会いたくないかね」

「あいつらの性格からして、どうせ悪い方やるな」

「同意見ね」

「ここは一つ、俺が一肌脱いだるか」

「ここで裸になるの？」

「んな訳あるかいっ！」

――夕方。

寝るには眠気が足らず、食欲はなく、動く気にもなれない。

何をするにも気力が起こらない。

でも、何かしていないと里佳さんのことを考えてしまう。

昔、失恋をした女性が死ぬまで詩を書き続けるのに没頭したという。

少しでも気を紛らわせるために。

拳句、教科書に載るほどの詩人になるとは皮肉な話だ。

聞いたときは馬鹿馬鹿しく思えたが、今は分からないでもない。

……。

……。

……。

分からないでもない？

それって俺が失恋したって思ってるってことだよな……。

分かりきっていたことだが、改めて思う。

俺は里佳さんが好きだった、と。

もしも……もしも願いが一つ叶うとしたら何と願うだろう？

楓さんが事故に遭う前まで時間を戻すだろうか。

里佳さんと出会う前まで時間を戻すだろうか。

楓さんとの記憶を俺の中から消すだろうか。

里佳さんとの記憶を俺の中から消すだろうか。

あるいは二人との記憶を消すだろうか。

……。

いくら考えても無駄だ。だってそれは『もしも』の話。

だから今俺は苦しんでいるのだ。

どんなに願っても『もしも』なんてないのだから。

ピンポン

珍しく思考に耽っていたところに水を差された。

最近やけに来客が多いなあ……って言っても2回だけか。

あいにく誰とも会いたくないので無視することにした。

ピンポーン♪ピンポーン♪ピンポーン♪ピンポーン♪ピンポーン♪
ポンピン♪

しつこい。

しかも最後の音が何故か微妙に変だった。

このまま鳴らされ続けるのも非常に鬱陶しいが、意地でも応じたくない。

布団にくるまってピンポン嵐が止むのを待った。

……。

……。

……。

どうやら諦めてくれたらしい。

ブブー……ブブー……。

右足の太腿のあたりが規則的に振動する。

すぐにケータイが震えてるのだと気づき、ポケットから取り出して開く。

どうやら誰かからメールが来たようだ。

『From：大原一也

件名：マンション1階、自動ドア前より殺意を込めて（-|-#）

』

「……」

内容を見ずにメールを削除して自動ドアの開スイッチを押した。

怖いんだ

「初めて来たけど、なかなかええところ住んでるやん」

「まあ、そうだな」

「で、風邪はもう治ったんか？」

「……ゲホツ、ゲホツ。ああ、悪い。まだちよつとな」

「ふーん。そういえば、千堂も風邪言うてたな」

「そ、そうか。偶然だなア……はは」

「そうか。里佳さんも風邪ということで休んだのか。」

「しくじったなあ。頭痛にしとけば良かった。」

「こいつが訪ねてきた理由はおそらく俺と里佳さんのことを感づいたからだろう。」

「どうやってバレずに追い返そうか……。」

「とにかく、お見舞いにきてくれてありがとな」

「別に見舞いに来たわけじゃあらへんよ」

「……は？じゃあ何しに来たんだ？」

一応、すつとぼけたフリを試みるが、やばいな。

嫌な展開になってきた。

「仮病までして千堂と会いたくないんか？お前ら、一体何があったんや？」

「いや、別になにも――」

「言え」

急に一也の目つきと声色が変わった。

普段の態度とは打って変わって、ぞつとするような印象を受けた。

こいつは妙に鋭いときがある。これ以上は誤魔化しても無駄か……。

まあ、いずれ感付かれるとは思っていたこと。

それでも予想よりだいぶ早かったがな。

仕方なく一也に楓さんのことをかいつまんで話した。

……

……

…

「そんなことがあったんか」

一也は難しい顔をして最後まで話を聞いていた。

「俺さ……」

独り言を呟くように俺は話を続ける。

「今までで二人の女の子を好きになったんだ。一人はもうこの世にはいないんだけどな」

「……そうか。辛いな」

「ああ。人を好きになるって辛いんだな」

「何でわざわざまた辛い思いしようとするねん？」

「え？」

「二度も悲しい想いせんでええやろ。まだ千堂はお前の近くにおるやろ、アホ」

「……………」

「その亡くなった子は無理やけど、今の千堂を笑わせることはできるんとかやうか？」

「もう、遅いよ」

ドスッ！！

「かはっ……」

腹に激痛が走る。

何が起ったのか、すぐには分からなかった。

どうやら一也に殴らしい。

怒りを露にしたのを見るのは初めてだった。

「このポケット！！何べん同じこと繰り返すんや！」

「……………」

「同じとこばっかで足踏みしてんなっ！少しは前に進め！」

「……………」

「これ以上お前が何も変わらんなら、楓さんは無駄死にやぞ！」

怒気を含んだ声で一也は吐き捨てるように言った。

分かっているさ、そんなこと。

お前に言われなくても理解しているんだ。

「お前は千堂のこと好きなんやろ！？」

「……」

「あいつだってお前のこと好きなんやぞ！」

「……」

「それだけやない。これ以上、亡くなった人間を悲しませるな」

「……え？」

予想外の言葉に戸惑う。

今までの俺の行為が一也のせいで崩れてしまうのではないか。

そんな予感がした。

「悲しませるな、だと？俺のせいで楓さんが悲しんでるというのか？」

「そうや。きつと向こうだって辛い思いをしているはずや」

「なん、で？」

「好きな人が自分のせいで苦しんでるんや。当たり前やろ、どアホ」

「そ、そんなわけ……」

「彼女もお前のこと好きって言うてたんやろ？」

「……ああ」

言った。確かに言った。

別れ際に一度だけ『好きだったよ』と。

「それやにお前は、勝手に彼女の死を枷にして自分を苦しめ続けて」

「それはっ……」

「お前が惚れるほど良い子やったんやろ？もっと分かったれよ」

心の中にあつた何かが壊れていく。

ずっと俺の心を縛っていたものが。

「最初からお前のこと恨んでない。笑ってほしかったはずや」

「そ、そんな……。じゃあ、何のために俺は……」

「もう一度聞くで、裕樹」

「……」

「お前は千堂のこと好きなんか？」

だったらこれ以上、何を迷う必要があるのだろう？

何もないはず………ないはずなんだ。

けれど。

それでも、まだ俺の心を縛る一つの感情がある。

「怖いんだ」

「怖い？」

「ああ、そうさ！俺は里佳さんが好きだ！でも、怖いんだよ！」

「何が怖いんや？」

「俺の前から消えるんじゃないかって。大切な人がまた」

「……」

もう二度と味わいたくないあの喪失感。

それは何日も何ヶ月も何年も俺を苦しめてきた。

「もしまた失ってしまったら、今度こそ俺はもう……」

「ほれ」

そう言つて一也が俺に渡してきたのはケータイだった。

何故こんなものを俺に渡してきたんだろう。

「……ん？通話中？」

「ええから話しかけてみ」

なんだか、ものすごく嫌な予感がした。

「もしもし？」

『あの……私です、裕樹さん』

予感的中。

ケータイは里佳さんに繋がっていた。

「まさかとは思いが、全部聞いていたのか？」

『……はい』

俺はケータイの持ち主を殺意を込めて睨んでやった。

それに動じることなく、そいつはニヤニヤ笑っていた。

全て一也に謀られていたんだ。

『ずっと聞いてました。裕樹さんがずっと苦しんでたことも、私のこと好きって言うてくれたことも』

「そうか」

『今度は裕樹さんが聞いてください。私の想いを』

「うん」

『私も……私もあなたが好きです』

それは初めて言葉にされた彼女の想い。

こんな俺を、彼女を拒絶した俺を、好きと言ってくれるのか。

胸に熱いものがこみ上げてくる。

でも……。

「でも、俺は——」

『だから、約束します』

「約束？」

『私はずっと、あなたの近くで笑っています。これからもずっと』

「……」

『それでもダメですか？』

電話を持つ手が震える。

里佳さんはこうまでして俺を好きと言ってくれてるんだ。

「俺、楓さんのことも好きなんだぞ？」

『知ってます』

痛くもないし、悲しくもない。

「俺、また里佳さんを泣かせるかもしれないよ？」

『また仲直りすればいいじゃないですか』

けれど、確かに俺の頬を伝うのは――。

「俺、里佳さんを幸せにできないかもしれないよ？」

『あなたが近くにいてくれれば、それで幸せです』

とめどなく溢れてくる涙だった。

「聞いてほしいことがあるんだ。今まで言えなかったことが」

『はい』

「俺は、千堂里佳が好きだ。これからもずっと、な」

そつ口にした途端、暖かい気持ちになる。

想いを伝えたのは自分なのに。

『やっと……聞けました。あなたの気持ちが』

「ごめんな。電話越しになってしまって」

『いいんですよ。今、とても幸せですから』

「そっか」

『……………』

「……………」

お互いに黙り込んだが、心が繋がっているような心地良さが生まれる。

いつまでもこうしていたいと思う。

『なんだか、もったいなくって電話が切れませんね……………』

「俺も同じことを思ってた。でも、それだといつまで経っても会えないだろ」

『それもそうですね』

「名残惜しいけど、一旦切ろうか」

少し無言の空白があったが、すぐに返事がきた。

『もう少しだけ、このまま』

「……………わかった」

それでいいんだよ

「じゃーな」

「はい」

まだ繋がったままでもいいという気持ちを抑えてボタンを押した。

結局、電話を切ったのは30分も経った後だった。

まだ、余韻が残っていて体が熱い。

今もこうして目を閉じると里佳さんの顔が浮かんでくる。

こんなにも優しい気持ちになれたのは何年ぶりだろう。

もう誰かを愛しく思える日が来るとは思っていなかった。

ありがとう、里佳さん。

……。

……。

「一体いつまでそうやってケータイ見つめてんねん？」

「え？」

振り返ってみるとそこにはニヤついた顔の一也がいた。

ボカッ！

「痛ぁ！何すんねん！」

「気をきかしてどこか行つてろよ！」

「ったく、誰のおかげで仲直りできたと思つてゐるんや？」

そう言われて、思い出す。

もし一也がいなかったらどうなっていただろう。

「……その、ありがとうな」

「ま、友達やからな。それにしても通話代が……」

「そつケチくさいこと言つなよ」

「いや、明らかに長電話しすぎなんやお前らは！」

こういうところが無ければ、ホントに良い奴なんだがな。

でも、こっちの方が一也らしくていいか。

「それはそうと、お前ってホントに大阪出身なのか？」

「はあ？」

「ブチ切れて俺を殴った時は、訛^{なま}ってなかったぞ」

「……。まあ、いずれ分かるときが来るやろ」

そう言っ^て笑った一也。

「なんじゃそりゃ」

こうして笑えていられるのは一也のおかげ。

だから俺は大切な人と向かい合うことができた。

本当にありがとうな、親友。

「よし。お礼としてお前と紫苑さんの仲立ちをしてやろう」

「恩を仇で返す気か!？」

——数日後。

空は晴れ渡り、爽やかな風が吹いている。

休日を利用して里佳さんと一緒に行きたい場所があった。

楓さんの墓だ。

彼女が亡くなってから、俺はずっと悲しみを引きずったまま過ごしてきた。

そして人を好きになるまいと。

今までずっと。

だから、そのことを謝りに来たんだ。

「あの、裕樹さん」

「ん？」

「本当に私がここに来てよかったんでしょうか？」

「ああ。ちゃんと伝えておかないとな」

紹介するよ、楓さん。

俺の横にいる人は千堂里佳さんだ。

彼女と共に生きていこうと思ってる。

一緒にいれば俺は悲しみを乗り越えられる。

心の底から笑っていられるんだ。

正直、失うのが怖いという気持ちが消えたわけじゃない。

けれど里佳さんずっと一緒にいたい、そんな想いが上回っている。

本当に大好きだから。

……。

……。

最後に言わなきゃいけないことがあった。

ごめんな。

今まで悲しませてしまったことを赦してください。

里佳さんと同じぐらいあなたを好きであることを許してください。

「ふう……」

「ずいぶん長いこと目を閉じてましたね」

「今までここにきたことなかったからな。その分も含めて色々とな」

「え？初めて来たんですか？」

「里佳さんのおかげでやっと来られたよ」

そう言うと彼女は微笑んだ。

それにつられて俺も笑う。

「さて、そろそろ帰るか」

「はい」

俺たちは手をつないで歩き出した。

「それでいいんだよ、ユーキ君」

「ん？」

俺は立ち止まって振り返った。

今、声が聞こえたような気が……。

「どうかしましたか？」

「……いや、なんでもない」

ああ、そっか。

やっぱりこれで良かったんだな。

少し時間がかかったけど、これからは笑って生きるから。

大切な人と共に。

それでいいんだよ（後書き）

この物語を最後まで読んでいただき、ありがとうございます！
評価、感想を残してくれると作者として非常に嬉しいです。
というわけでは是非お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2330k/>

暖かな想い<アナザーストーリー>

2010年10月10日05時39分発行